

393

162

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30^{6m} 1 2 3 4 5

始



海軍少佐外山豊三著

固本策正解

東京 明誠館發行

393-162

海軍少佐外山豊三著

固本策正解

東京 明誠館發行

大正
10 5.18
肉交

凡例

- 一、 原本は嘗て絶版となれるを、乃木大將深く之を遺憾とし、更めて梓に上したるものなり。
- 二、 豊前中津藩に二大真人を出す。曰く渡邊重石丸、福澤諭吉の二人なり。共に神州開發に努む。其の狀恰かも渡邊翁は靈的活動を爲したるが如く、福澤翁は體的活動を爲したるが如し。

- 三、 書中往々辭句の整はざるものあり。是れ編者の淺學短才の然らしむる所、之を公表するは恥を天下に晒すものなり。然れども是れ固より覺悟する所にして、敢て之を意に介せず。唯自ら糞土となつて、他を肥し得れば足れりとす。讀

凡例
者之を諒せよ。

海軍少佐 外山 豊 二識す

固本策正解 目次

固本策卷之一……………一

古語拾遺論上……………二

古語拾遺論中……………八

古語拾遺論下……………二四

固本策卷之二……………二四

古事記論上……………二四

古事記論中……………三〇

古事記論下……………三九

目次……………一

固本策卷之三……………四七

神代紀論上……………四七

神代紀論中……………五三

神代紀論下……………五九

固本策卷之四……………六四

祝詞式論上……………六四

祝詞式論中……………七二

祝詞式論下……………七八

固本策卷之五……………八五

萬葉集論上……………八五

萬葉集論中……………九一

萬葉集論下……………九六

固本策附錄……………一〇二

讀論語上……………一〇二

讀論語中……………一〇八

讀論語下……………一一三

原著者跋……………一二九

原著者傳……………(目次終) 一三三

固本策正解

豊前中津故渡邊重石丸原著

海軍少佐 外山豊二編著

固本策卷之一

古語拾遺論上

神皇の道は禮樂より大なるは莫し。何を以て之を謂ふや、曰く天尊地卑、四時行はれ、百物生ず。之を見るに目を以てし、之を聞くに耳を以てす。天神の化六合に行はる。禮樂の妙用に

非るは莫し。是故に山時川流、花紅柳綠、以て秩序を亂さざるものは禮なり。鶯啼雷吼、虫吟風怒、以て人耳を快にするものは樂なり。天地既に自然の禮樂あり。人間豈獨り自然の禮樂なからんや。何をか自然の禮樂と謂ふ。曰く天地剖判より君は令し、臣は共にし、父は慈に子は孝に、兄は愛し弟は敬し、夫は和し妻は柔に、姑は慈に婦は聽き、各其の宜しきを得るもの之を禮と謂ふ。石屋戸の變、天稚彦の喪の如く、俳優歌舞、啼哭悲歌、或は以て神怒を解き、或は以て喪儀を助く。素戔鳴尊の沼琴を携へ、事代主神の磐笛を製し、或は以て勇悍の氣を洩らし、或は以て經國の勞を慰めて、優游閑雅各其の趣を得るもの之を樂と謂ふ。

蓋し神皇の治、天地の道を奉じ以て億兆に君臨す。其の意一に至誠に出づ、是れ報本反始の禮由て興る所以なり。報本反始の禮は唯祭を大と爲す。天照大神の尊を以て猶は親しく新嘗を爲し以て祭祀の道を奉ず、其の旨深し。皇祖瓊杵尊の下土に降臨するや、神漏伎、神漏美命授くるに天詞太詞事を以てし、以て天下を治むるの要訣と爲す。而して其の所謂祭は禮樂を以て之を行ひ、中臣、齋部俱に祠祀の職を掌り、猿女君氏神樂の事に供したるが如き、以て見る可し。祈年、鎮花、風神鎮火、道饗、大嘗、鎮魂、大祓、生島、足島、坐摩、御門、御殿、御縣、山口、廣瀬、龍田等の諸祭に至りては、其源は蓋し盡く神代に昉む。而して帝の神と其際未だ遠らず、神物も官物

も亦別有るなし。帝にして神、神にして帝、其の重きや至れり。嗚呼朝廷自ら重きことは是の如く、神を敬することは是の如ければ則ち民の各土に在るもの帝を神に比し、神を帝に比し、膽仰敬禮唯及ばざるを恐る。皆曰く、某神は忠誠の神なり、某神は民に功德あり、某神は吾の祖なり、某氏は某神の後なり、此神は風雨を掌り、彼神は疫癘を禳ひ、此儀は某神に拘まり、此曲は某神より起る。目に觸れ、耳に熟し、然る後貴賤老少口口相傳し、以て前言往行を識る。父は以て子に傳へ、子は以て孫に傳ふ。是に於てか、神皇の徳深浹治漸漬千歳忘れず、以て敦厚淳朴の俗となる。此に由て之を觀るに、禮樂の人を染むる豈言語の能く及ぶ所あらんや。

夫れ天下の味無しとするものは風水に若くは無し。而して物の能く尙ばるゝなき其淡を以てなり。禮樂は風水なり、教法は酒醴なり。人の酒醴を甘しとする者は、風水の美を知らず、世の教法を談する者は、禮樂の化を知らず。是に由て之を言ふ書契以來古を談するを好まず、浮華競ひ興りて還て舊老を嗤ふもの蓋し常人の常にして、勢の必らず至る所亦怪しむに足るなし。獨り怪しむ、天智帝の明、大織冠の識を以て、猶ほ神皇の道を洞見すると能はずして、新を喜び故を忘れ、此を捨てて而して彼を取り、以て百度を改易したるを。是に於てか神州敦厚淳朴の俗、變じて異域浮華の風となり、其事を制し、法を垂るるの謬何ぞ甞に遺漏のみなりと云はんや、廣成禮樂未だ明らかなら

すと云ふを以て、之を斥くるもの蓋し婉言以て之を憤りしなり。夫れ禮樂の名異域に出づると雖も、其の實は神皇億兆を陶冶し、天下を経緯する所以の大法なりとす。廣成禮樂を神代に復さんと欲す、卓見確論實に一代の偉人と謂ふ可し。嗚呼廣成の志行はれざるにより、儒佛の迹日に興り月に熾んに、禮樂の化燔ゆ、其極は帝王を絶海に移すもの之有り、天下を股掌に弄するもの之有り、皇室陵替し華胄亦隨て凋衰す、其禍豈特に忌部氏の不幸のみならんや。然らば則ち之を如何にして可なるや曰はく鄙俗を往代に易へ、秕政を當年に改むるもの廣成の志なり。學者今日の務尤も廣成の志を以て心と爲し、時に隨て制を垂れ、絶を興し廢を繼ぎ、以て千載の闕典を補ふべきのみ。若

し明治維新の年に當り、望秩の禮を制する能はず、又何をか之を學と云はんや。今一人有りて齊と曰ひ、魯と曰ひ、文武と曰ひ、周孔と曰ふ。叩くに神州の典を以てすれば則ち茫然たり。之を支那の奴隸と謂は則ち可なり、之を大日本人と謂ふは則ち否なり。又一人有りて釋迦と曰ひ、達磨と曰ひ、阿難と曰ひ、迦葉と曰ふ。問ふに神聖承統の事を以てすれば則ち茫然たり。之を印度の奴隸と謂ふは則ち可なり、之を大日本人と謂ふは則ち否なり。又一人有りて英と曰ひ、佛と曰ひ獨と曰ひ、米と謂ふ。諮ふに神州開國の源を以てすれば則ち茫然たり。之を西洋の奴隸と謂ふは則ち可なり、之を大日本人と謂ふは則ち否なり。嗚呼天下の曠、三千八百萬人の衆を擧て之を大觀するに則比比

として人外國の奴隸とならざる者は莫し、之を夷狄を中國に養ふと謂ふ、亦何ぞ不可ならんや。抑も儒者も人なり、佛者も人なり、洋學者も亦人なり。而して其の徒皆視たる面目有り、浮華を尙び、舊老を嗤ひ、大日本人となるを愧づること甚しければ則ち降を賣りて後を恐るゝなり。然らば則ち今日滿天の怪雲愁雨安んぞ廣成大同三年憂國の涙に淵源せざるを知らんや。古人言有り曰はく、禮樂崩れて夷狄横はると、豈信ならずや。

古語拾遺論中

神皇の道其の親に私するものは、公の大なるものなり。世の古語拾遺を論ずるもの往々にして、其の言私に涉るを駁す。予

謂へらく古語拾遺の言私は則ち私なり、然れども其の私を論ずるは即ち公を論ずる所以なり。人は徒らに其の私を論ずるを見て其の公を論ずる所以を見ざるなり。其の父羊を攘む。子之を證するに忍びざるは人情なり。況んや其の父未だ嘗て羊を攘まざるをや。廣成は其の父の羊を攘まざるを訟へたるものなり。之を私すと謂ふ可きか。其の言の父を庇ふに似たりとするものは、聽く者の不明なり。其の言忌部氏の口より出でざらしめば未だ必らずしも喋々之を駁せざるなり。言は一にして、聽者に自ら公私の別有り察せざる可らざるなり。且つ夫れ忌部氏は華胄なり。中臣忌部並び仕へ、古より然りと爲す。天祖より之を視れば何ぞ彼此有らんや。冷熱節を變ずるは人の情なり。設へ

ば中臣氏をして衰頹忌部氏の如くならしめば、鎌子不比等の輩
 此等の書を作つて、以て之を奏上せん。其之を如何と謂ふに予
 は斷々乎として世人の中臣氏を右けずして、忌部氏に黨するを
 知る。且つ廣成家系の冤を朝に訟へんと欲せば、其の意必らず
 謂はん、侃々公言するに非れば以て之を動かすに足らずと、豈
 誣ゆるに無證の僞言を以てすべけんや。蓋し忌部氏自ら傳授の
 言あり、其の記紀二典と異なる者は即ち古語拾遺の名、由て興る
 所以なり。而して貴賤老少口口相傳するは古俗然りと爲す。則
 ち一事の判一となり、二となる。亦た其の所なり。世人印板を
 以て之を視んとするは、古を知らざると謂ふ可し。後人往々其
 の記紀に同じきものを信じ、其の異なる所以を取らず。殊に其の

異なる所以は是れ其の貴ぶべしと爲す所以を知らず。且つ古傳中
 諸書の説同じくして併謬するものあり。説異りて而して或は獨
 り正を傳ふるものあり、亦安んぞ古語拾遺の傳、記紀に勝れて
 之より上とする者あらざるを知らんや。書紀の一書には往々異
 説を擧て、事考據す可き者あり。古事記の書亦書紀と傳を異に
 する者あり。一是一非、未だ容易に之を取捨すべからざるなり。
 故に學者其の已の意に合する者を取りて、其合せざるものを舍
 て、以て上古一傳と爲して之を珍重す。獨り古語拾遺に至りて
 は、或は忌部氏を稱揚する者を斥け、斷じて廣成の捏造する所
 と爲す、豈に冤ならずや。吾意ふに此時に當りて、人猶ほ古を
 知る者有り。假に廣成をして僞言を捏造せしむるとも人決して

之を信せず。嘗に人之を信せざるのみならず、其祖を辱かしむるや益甚だし。然らば則ち上書を以て祖先の系を白にせんと欲し、反て之を昧味ならしむ。是れ庸人だも爲さる所なり。曾て廣成の高學卓識にして之を爲すと謂ふか。此際に當つて信を朝に取る者は、唯至誠惻々として人を動かすの誠あるのみ。此に由て之を言ふ。古語拾遺の書、忌部氏の私言に非ざるや明らかなり。其父室を作り、其子堂して之を構ふ、孝の道なり。廣成堂構の孝を念ひ以て乃祖の業を聿脩せんと欲す、眞に太玉命の胤たるに愧ぢず。

夫れ鏡作玉造等の神裔、載せて古典に在る者は枚擧すべからず。而して後裔衰頹し、業を失ふや久し。未だ嘗て一人として

奮言廣成の如き者有るを聞かざるなり。嗚呼鏡作玉造等の裔をして皆其の富を求め利に趨くの心を易へ、廣成が歎く所の心たらしめば、天下豈浮華を崇尚し、以て舊老を嗤ふの俗を成さんや。蓋し其の浮華を尙び、舊老を嗤ふの人は、神代諸神の後裔と爲て、中臣鎌子神祇伯を辭せしが如く、以て時風を徵す可し。後の學者此の之を尤めず、廣成を尤む。何ぞ其の戻れるや。昔平治の際源牛若鞍馬に在るや、年甫めて十一、諸家の系譜を讀みて、自ら其の先世を知り、慷慨憤激終に克く其の志を成すと云ふ。廣成齡八十を踰え蹇々の誠を效すや此の如し、嗚呼英雄明哲の士、其の感する所符節を合するが如し、吾故に曰ふ、神皇の道其の親に私しするは乃ち公の大なる者なり。今の名冑華

族となる者之をして廣成の志を師とせしめば、他日猶は以て君親を地下に見る可きなり。其の忠孝の人と爲るを得ると否とは、此に決す。然らざれば後の華族を視る、今の忌部氏を視るが如くならん。悲しいかな。

古語拾遺論下

神皇の道は終に復興すべからざるか。曰く奚んぞ夫れ然らむ。上は其の道を失ひ、民散するや久し。道の行はれざるは、上より之を廢したるなり。豈盡く蠢氓の罪のみならんや。物に本末あり、事に終始あり。根抵を傷つければ其の木枯る。言論の戻るものは其の事躓づく。智者を待すして之を知る。學の人身に

關する衣食より甚しき者あり。

神州の正氣委靡して振はざるものは、蓋し異邦の學ありて以て之を蠱するによる。何を以て之を謂ふや。曰く上古の世、各承くる所あり、貴賤老少口口相傳ふるものは上古の學なり。是時に當り人各其の君を君とし、其の祖を祖とし、其の國を國とし、其の家を家とし、其の内を内とし、其の外を外とす。而して天子は此を以て天下を治め、國造は此を以て其の國を治め、蒼生は此を以て其の家を治む。大小の事古を師とせざるものなく、神を師とせざるものなきなり。予意ふに所謂貴賤老少とは朝野に通ずるの名にして其の人、口口相傳し、戒慎勸勵すれば則ち其の功或は讀書の功に倍する者あり。其の風を傳へて俗を

成すに及べば、誰か疑を前言行に容るゝ者あらんや。
 皇天傳國の詔、二尊經營の跡、醫藥禁厭の類の如き、朝野に
 播き談論に發し、耳に觸れ心に勒し、存じて忘れざれば千百世
 も猶ほ一日の如し。是れ其の純一の俗を成す所以なり。漢籍入
 貢せしより頼に耳目を改め賤丈夫なるものあり、衆に告げて曰
 く、彼に聖人なるものあるに、吾邦に諸れ有りや。曰はく無し。
 彼に詩書なるものあるに吾邦に諸れ有りや。曰はく無し。彼に
 禮樂なるものあるに吾邦に諸れ有りや。曰はく無し。彼に仁義
 忠孝なるものあるに、吾邦に諸れ有りや。曰はく無し。然らば
 則ち彼れ我を夷と謂ふも亦何ぞ不可ならんや。是に於てか人心
 の彼に向ふや、沛然として復た禁する能はず。内は自ら攻撃し、

兄弟の墻に閔ぐもの始まりぬ。殊に知らず、所謂詩書なる者は
 吾邦に之有り。禮樂なるものは吾邦に之有り。仁義忠孝なるも
 のは吾邦に之有り。而して身神聖の化に優游涵泳する猶ほ魚の
 水に在るが如きを知らず。道は邇きに在りて、諸を遠きに求め、
 事は易きに在りて諸を難きに求む。儒者も亦迂遠ならずや。且
 つ夫れ支那の俗たる言を實より浮すものあり、行ひ言に及ばざ
 るものあり。冉求の季氏に黨し、仲由の衛輒に死す、不忠不義
 孰れも大なり。姫且の才を以て猶ほ頑民を服する能はず、時事
 知るべきなり。孔丘の賢を以て猶ほ其の婦を去る、家法亦知る
 べきなり。學者之を察せずして、其の喋々人を教ふる者を見て
 膽仰俯伏以て聖賢の行亦此の如しと爲す、過てり。家に呵怒の

聲あるは蕩子あり以て之を亂し、國に苛酷の法あるは賊民有りて以て之を犯せばなり。

君君たらず、故に之に教ふるに仁を以てし、臣臣たらず、故に之に教ふるに義を以てし、父父たらず、故に之に教ふるに慈を以てし、子子たらず、故に之に教ふるに孝を以てし、夫夫たらず、故に之に教ふるに和を以てし、婦婦たらず、故に之に教ふるに貞を以てす。其之を教ふる所以のもの、適其浮薄の俗を證するに足る所以なり。嗚呼道既に亡ぶ、故に名教を造作して以て之を導きしなり。神州の人其の是の如きを虞れず、其書の入るや、虚心平氣以て之を讀み、目眩み耳駭き、氣動き心亂れ、魂飛び魄奪はれ、頑然化して唐虞三代の人と爲る。嗚呼是れ何

ぞ無病の人奇藥を服し以て奇病を求むるに異ならんや。佛法の神州に入るや、其の毒殆んど是より甚しきもの有り、君臣無く、父子無く、夫婦無く、兄弟無く、朋友無く、圓首緇衣本地垂迹の説を作りて以て其の祖を誣ゆ、而して王公大人身既に印度の人と爲るを省みず。先王の流風遺俗存するもの蓋し幾ばくも無し。近時に至り洋教駭々として日に盛んとなり、其の君無く、父無きの教、風を亂し俗を敗る。之を佛に比すれば其の害殆んど之に幾百倍するを知らず。譬へば敗船海に入るの勢の如し。苟くも之を所するなくんば、國家の覆没を免れんと欲するも得べけんや。嗚呼此の三害を神州に聚む、將た何の策を以て之を救はん。曰く昔僧高辨北條泰時に謂ふて曰く。國を治むる猶ほ

病を治するが如し。先づ其の病因を知るべし。病因既に明らか
 なれば、其の薬を下す亦易々たるのみ。今日世を救ふの策亦此
 に出でざるを得ず。何をか良薬と謂ふ。曰く神州人の穀食せざ
 るや久し。其の困憊亦宜し。神典は神州の穀食なり。一日之を
 與ふれば元氣の復、斷じて疑ふべからずと。廣成曰く書契以來
 古を談するを好まず、其の然る所以のものは未だ必らず異學
 の之を亂すに由らすんばあらず。

今や朝廷斷然異學を棄絶し、之に易ふるに上古の學を以てし、
 貴賤老少をして口々先王の法言を誦せしめば、天下向ふ所を知
 る。夫れ神州の武を尙ぶや久し。天下終古に堯舜湯武なきも可
 なり一日として信長秀吉無かるべからず。天下終古に釋迦達磨

無きも可し、一日として加藤清正本多忠勝無かるべからず。今
 天下の華族士族、神官教職人民の徒をして一旦翻然として業を
 改め、以て斯學に従事せしめば、十年を出でずして糺糺百萬の
 士、養ひて致す可し。而して文祿慶長の俗を今日に見るや必せ
 り。果して此の如くんば異徒の冥頑亦吾穀中に在るのみ。必ら
 ずしも長く外國の奴隷たるに甘んせざるなり。夫れ君となりて
 は神武の如く、后となりては神后の如くば、以て譏無かる可し。
 皇子となりては倭建の如く、臣となりては武内の如くば、以て
 止む可し。何ぞ必らずしも漢人を祖述し、洋人を憲章して然る
 後に學と爲さんや。蓋し文人の文弱は、武人の武愚に如かず。
 文士の巧言饒舌は、武士の質直猛悍に如かず。神州の俗は古よ

り然りとなす。故に神州の道昇平儒者の言に隠れて、亂世武人の跡に見るは、昭乎として誣ゆ可からざるなり。時に嗛然として座に笑ふものあり。曰く今日是れ何の時ぞ、敢て上古の學を興さんと欲す、豈迂腐の極ならずやと。重石丸曰く、吁子諱ふことなかれ。吾明かに子に語らん、吾聞く楚宮の餓死多きは、其の細腰を好むに因る、吳國の瘵疾多きは、其の劍を好むに因る。上に好む者有れば下之より甚だしきものあり。草の風に靡く誰か能く之を禁せん。子未だ華族士民の頑鈍利を嗜むを見ざるか。其の特操無き今日より甚しきは莫し。苟くも英雄ありて義を以て之を鼓し、利を以て之を驅り、徳を以て之を誘ひ、刑を以て之を威せば、吾其の風靡の速やかなること意外に出づる

復た何ぞ疑けん。今や令を下し正學の目を天下に掲ぐるに、其の要四あり。一に曰く浮華を黜く、二に曰く耆老を尙ぶ、三に曰く故實を問ふ、四に曰く根源を識る、舉て之を總ぶる者は天子の學なり。天子の學之を禮樂を講明すと謂ふ。入りては則ち其の祖に追孝し、出でては則ち一人に事へ、天子の心を以て心とするものは、公卿大夫の學なり。身を勞し親を養ひ、家を富まし國を益し、天子の心を以て心と爲す者は、士庶人の學なり。如夫れ泰平の化に游泳し熙々皞々民日に善に遷り、之を爲す者を知らざるは、禮樂の化なり。蓋し浮華を黜くれば實學舉り、耆老を尙べば輕躁の風熄む。故實を問へば國體立ち、根源を識れば萬世不易の國是定まる。嗚呼果して斯道を興さんと欲せば、

固本策正解 二四
亦施設の法、陶冶の術の如何を顧みるに在るのみ。

固本策卷之二

古事記論上

王化の行はれざるや久し。神典皇史は、荒唐不經にして以て信を取るに足らざるか。聖經賢傳は未だ世に明らかならざるか。說教演説の士、遐陬僻壤に未だ遍ねからざる所あるか。抑も明治維新の化は人心に未だ浹洽せざる所あるか。曰く皆非なり。嗚呼天下の亂るゝや久し。王室自ら祖宗の典を棄て、霸府の政復た古道に遵考せず、降つて今日に及び先王の澤盡く。士の榮利を競ふもの、神典の何物たるを知らず、百説意に任

せ詭遇功を求むること今日より甚だしきは莫し、是れ王化の行はれざる所以なり。蓋し古事記は神州經世の大典と爲す。其の書たるや啻に儒家者流の所謂尙書春秋の類たるのみならんや。何となれば是れ則ち天神の法を垂るゝ所、帝王の範を取る所なればなり。故に曰く步驟各異り、文質同じからずと雖も、古を稽へ以て風猷を既類に緇し、今に照して以て典教を絶たんと欲するものを補はざるは莫し。學者知らざる可からざるなり。夫れ世には沿革ありて、道に古今無し。天神の道を體する者は、固より天を極め命を知るべし。而して毫も卑屈阿世の念あるべからざるは、斯の道なり。之を神代より傳へ、子孫千億繼々承々敢て失墜せず。天子より三千八百萬人に達するまで一なり。道に順

へば則ち吉、道に逆へば則ち凶、道の盛衰は以て天下の存亡をトす可し。天子曰く耶蘇拜す可しと、三千八百萬人曰く如何ぞ外神を拜せん。天子曰く祭祀を廢すべしと、三千八百萬人曰く如何にして祖宗に背かんや。天子と諤々相下らざるものは蓋し道ありて以て之を準と爲せばなり。天神の道を傳ふること既に此の如し。故に斯の書を読む者は、宜しく身を皇祖天神に比すべし。身卑賤と雖も道を尊しとすればなり、身に行ふ所の者は天神の事なり。口に言ふ所の者は天神の法なり。而して天工に代つて、天職を奉ず、是れ國體を維持すると共に、皇基を護衛するの事に非るは莫し。天下道有れば、道を以て身に殉じ、天下道無ければ、則ち身を以て道に殉ず。劍となり玉となり、折

れて猶ほ利に、碎けて光有り、臣子の事畢る。天子と雖も豈吾身を左右し得んや。蓋し人は神なり、神は人なり。神人同體將に以て上は天神の徳を我に生ずる者に報ひんとす。我は寧ろ自ら任するに邦家經緯の事を以てせざる可けんや、是れ學者の心なり。悲しいかな、世の公卿大夫其の適從する所、儒に非ざれば佛、佛に非ざれば洋、復た世に先王の法言有るを知らず、上天を敬せず、祭を益無しと謂ひ、以て世の國學者流の人を笑ふ。而して國學者流の人窠窟甚小、見る所極めて卑し、詞章文字訓詁考證の學を修めて、以て媚を王公大人に獻ず、氣節無く廉恥無く、其の技藝を賣ること俳優と何ぞ擇ばん。降て神官社會の流となり、教導者流の人となる。是に於てか天神の大道龜分瓜

裂し、各處に黨を成す。其の道ふ所中道、其の教ふる所中教、牽強傅會至らざる所無く、天を誣ひ人を欺き、隱を索め怪を行ひ、民心潰裂治を欲して益々亂る。然らば則ち王化を廢絶するものは、公卿大夫なり。風猷を沮敗するものは、國學者流なり。典教を攪亂するものは、神官教職なり。嗚呼誰か又た邦家の經緯、王化の鴻基彼に在らずして此に在るを知らんや。天下道有れば禮樂征伐天子より出づるは、古今の通制なり。今や冠婚喪祭の禮を擧げて、之を市井神官教職の徒に委ぬ。假令古に稽へ今に照らし、盟薦拜趨の式盡く古義に合するとも、亦私なるのみ。其王政を亂し邦典を敗る、孰れも大なるに公卿大夫恬然坐視して、自ら其の職を失ふを知らず、先聖道を傳ふるの意荒む。

吁天武帝の古事記を撰ぶ、固より以て天下に公けにして、豈一巫祝に私せんや。且つ夫れ漢洋學者の書を講ずるは、以て政に従事せんとするなり。彼をして他日志を得せしめば、則ち其の神官教職を高閣に束ぬるや、固より論を待たざるなり。而して學者の神典を講ずるは、將に以て神官教職を求めんとす。是れ先づ己の身を擧げて、以て之を餓虎に餒はしむるなり。其の計を爲す亦左にあらすや。

夫れ天祖の道、宇宙に網羅して、混々蕩々至大無外、將に以て漢洋學者を吾掌中に赤子視せんとす。則ち吾黨の道に志す、以て其の志氣を恢廓せざるべからず。吁、風猷頽れ典教絶ゆ、當今の世、吾黨の士出でて之を救ふに非ずんば、其の誰か

べき。昔大己貴命殘賊を驅除して、天下を皇孫に授く。盛徳大業民今に到るも之を稱す、然らば則ち志士の此書を講ずるもの、將相もて自ら期し時有りて之を爲す亦何ぞ不可ありや。士となり隷となり、農工となり漁商となる。古の人之を行ふ者有り。其遇不遇の如きは天なり。窮すれば則ち獨り其の身を善くし、達すれば則ち兼て天下を善くす。儒者猶能く之を言ふ。噫斯人なかりせば、吾誰と與にか歸せん。如し夫れ詞章浮華の士、神官教職の徒千百群を成す何ぞ天下に輕重有らんや。

古事記論中

帝系の上帝に出でて、赫々たるを疑ふ可からざる者、唯我大

日本帝國を然りと爲す。蓋し上帝の號、四海萬國同神異名、各尊崇を極む。稱して造化の神と曰ふ。而して國の開闢は亞細亞に起り、亞細亞の本は支那に在り、支那の本は神州に在り。

〔西説に亞細亞とは神を謂ふ。神聖首めて出づるの郷、故にこの尊稱あり。猶ほ神州と曰ふが如し。萬國傳信記事に曰く、亞細亞は世界開闢の初地、神聖これより出で、人類これより生ず。帝王國を興し、法教斯くして立つ。其の他文字諸技藝の屬、此洲に權輿せざるは莫しと。萬國航海圖説に曰く、亞細亞洲は人類初生の地、聖賢首出の郷、國土の開闢帝王の建國皆他州に先んずと。英國志に曰く、天下の萬國一脈に本づき、其の始め人類亞細亞洲に出で、後四方に散居し、數種に分ると。西洋聞見

録に曰く、孔子、釋迦、耶蘇悉く亞細亞洲に出づ、故に洋人以て人種淵源の地と爲し、最も之を尊重す。且つ火器の如き、火藥、針盤、時規、劊劊、諸技藝等の如く、悉く漢人の發明に出でて、洋人之を倣造するのみと。格物入門に曰く、磁器を用ふるが如き漢土より流傳するものなりと。蓋し此法遠く周代に始まり、宋の時に西洋始めて之を傳ふ。

重石丸曰く。西説既に此の如し、周易を按じて曰く、帝は震に出で萬物震に出づ。震は東方なり。王子年拾遺記に曰く、春皇至徳を天下に布き元元の類尊からざるは莫し。木徳を以て王と稱す。故に春皇と曰ひ、其の明叡八區を照らす、これを太昊と曰ひ、位東方に居し以て蠢化を含養し、木徳に叶ふ號して木

皇と曰ふ。家語に孔子曰く、五行事を用ふ、先づ木に起る。木は東方にして萬物の初皆これに出づ。是故に王者之れを則とすと。淮南子地形訓に曰く、正東易州を申土と曰ふと。これ申は神なり。又曰く扶木易州に在り、日の賸らす所。註に曰く扶木は扶桑なり、暘谷の南に在り。曠は猶ほ照らすが如きを曰ふ。是れ易州の東方なり。十州記に扶桑は地方萬里、上に太帝宮ありと。

葛洪枕中書に曰く、扶桑太帝の住、碧海の中に在りと。以上の諸書により以て國土の開闢は神州に淵源するの偶然ならざるを證す可し。

○神州に帝有り、須賣良美許登と曰ふ。須賣良美許登とは猶ほ

字内統馭の至尊と言ふが如し。其の系譜に曰く、天地剖判の世に、天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神あり、以て世界萬物を造化す。是れ須賣良美許登の始祖なり。是に由て之を観るに、帝系の上帝に出でて、赫々たるを疑ふ可からずと謂ふは、果して誣妄に非ざるなり。論者或は其書の神異を病とせり。予曰く然らず、是れ上帝造化の神機を洩らし、所謂風を生み火を産み、國を生み島を生めるが如き、蓋し古人天を信すること篤く、以て眞を傳ふるのみ。是を以て其の説朴なり、是れ至眞なる所以なり。然らざれば何ぞ古人の人を欺くに巧みならざるを。今夫れ舟車の海陸を走るは、蒸氣の力なり。鐵鍋水を煮し、田夫野老其の跳珠を見て、蒸氣の舟車を行るを疑ふは豈に理を知るも

のならんや。

大地の天間に於ける舟車の海陸より雷ならずして、神の造化を運す其の妙機遙かに蒸氣の上に出づ。後の學者或は田父野老の見を以て、之を議せんと欲す。亦多く其の量を知らざるを見る。夫れ天地草創の事悉く神傳鬼工に出づ、固より尋常の理を以て之を窺ふ可らず。

古人の確信して疑はざる所以のものは神人の別あるを知り、神は以て人に傳へ、人は以て人に傳へ、人心の淳、風俗の厚、教無くして教有り、道無くして道あり、道の本原天に出でて、天神の慶を無窮に貽す所以のものは、未だ必らず此に由らずんばあらず。或は曰く、帝系古きは則ち古し、而して我上世文物

の關るや、盡く之を支那に資りしは何ぞやと。曰く惡し。是何の言ぞや。

人世必需の物、宮殿より大なるは莫し。

衣服より急なるは莫く、穀食より善なるは莫く、刀劍より要

るは莫く、火工より便なるは莫し。而して神代既に悉く具はる。

之を穴居野處と謂ふか。伊邪那岐命の世に、八尋殿巍々として

天に聳ゆるの擧あり。之を毛を茹ひ血を飲めりと謂ふか。大日

靈尊の世に、狹田長田秋熟の事あり。之を裸體と謂ふか。栲幡

千々比賣命あり。以て綾羅錦繡を織れり。之を蒙昧と謂ふか。

刀劍戈矛を鍛へ以て護國の用に具ふ。之を無智と謂ふか。岩屋

戸の變、鐵を採り、鏡を制り、凡百火工の事發明せざるは莫し。

如し夫れ報本反始には、祭祀の禮有り。過を改め善に移すに

は、大祓の式有り。衣食足り兵器備はり、正徳の道立つ。是に

於てか皇化を海外に布く。

素盞鳴尊新羅に降るの迹有り、少名彥命常世の國に適くの事

有り。内は萬世不易の主を立て、以て經綸の業を制す。國造有

り、縣主有り、稻置有り、直有り、別有り、碁布星羅し以て其の

根を固め、而して寶祚動搖の憂無からしむ。是れ祖宗内を治め、

外を馭し以て國を建つる所以の大體なり。しかるに又何ぞ嘗て

力を支那に借らんや。予意ふに支那に皇天上帝有り、印度に梵

天帝釋有り、西洋に耶和華の説有り。蓋し我が古傳を本とせざ

る者莫し。而して支那の國を開くや、其れ或は素盞鳴尊少名彥

命との際さいに在るをや。是故に天を畏れ命を知るを以て教を立つ。其の説頗る古いにしへに近し。印度の闢びやく之に次ぐ。

西洋は則ち輓近ばんきんのみ。世愈々よきよき近くして教愈々あきあき盛ち、以て人心を惑亂わくらんす。

今や所謂皇天上帝、梵天帝釋、耶和華は、即ち神州固有の祖神なるを知らずして。而して囂々うきうき反て彼の教法を借り以て愛國の道を説かんと欲す。其の教法たるや、君を忘れ父を忘れ、身を忘れ國を忘れ、祖宗の典を忘れて、愛國の道果して何なんくに在るか。豊太閤の韓を征す。曰く夫れ日本は神國なり、神は即ち天帝、天帝は即ち神なり。秀吉夙夜しゆきそくやを憂へ、聖明を神代かみよに復し、威名を萬世ばんせいに遺さんと欲し、其の明虜を捷伐たつぱつするに方り、志四

百餘州をして盡く我が俗に化し、以て王政を億萬斯年に施さんと欲したるものあり。是れ豊太閤も亦帝系を以て上帝より出づると爲し、而して帝系の上帝に出づるは、神典に本づく。則ち豊太閤古を信するの篤きことを亦見る可し。夫れ豊太閤は則ち帝系の盛大を鳴らし、以て國威を殊方絶域に張らんと欲す。今の學者は則ち私智自ら喜び、以て國家の大計を忘る。其の見の高下何ぞ其の霄壤なるをや。抑も人亦言あり、曰く唯聖のみ聖を知る。嗚呼神智豊太閤の如き者に非ざれば、神聖の大道亦窺知し易からずと爲すなり。

古事記論下

古事記の書、大は以て天下を治む可く、小は以て一身を修む可し。此書先聖の口授に出で、帝室之を傳へ、諸家之を記す。天武帝の世に及び、稗田阿禮をして之を口誦せしめ、元明帝其の遺志を繼ぎ、太安萬侶に詔して之を撰ばしめたまひ、以て之を無窮の世に傳ふ。是れ二帝深く先聖の意を體する所以にして、其の天下後世に惠むこと、これより大なるはなし。予世の古事記を論ずるものを見るに、之を王公大人に責めずして、之を巫祝の徒に責む。其の無識たる論ずるなからんのみ。而して學者の古事記を讀むもの、徒らに巫祝の學に従事し、適々以て古事記を汚穢するに足る。此に人有り、利刀の用を武士に責めずして、婢僕に授くるに、正宗を以てす。豈危からずや。

世の古事記を汚穢するもの、何を以てか此に異ならん。夫れ學の名を失ふや久し。名の正しからざるは、國勢の振はざる所以なり。而して習俗の人を移すや、有識の士と雖も免るゝこと能はず。何をか名正しからずと謂ふや。曰く先王の道を學ぶもの、之を神道と謂ふ。先聖の學を講ずるもの、之を和學と謂ふ。しかるに漢學に至れば、則ち單に學と稱し、道と呼ぶ。是れ主を以て客と爲し、末を以て本と爲し、其の倒なるを自覺せず。蓋し中古の大學首として孔子を祀り、周易、尙書、周禮、儀禮、禮記、毛詩、春秋、左氏傳、孝經、論語等の書を以て、教科に列し以て唐虞三代の人を鎔化せんと欲す。

後の君子風を承け、流を汲むもの、唐虞三代の人を以て自ら

居り、而して會神聖の典を講ずるものあれば、群聚之を笑つて曰く、彼れ神道を學び、彼れ和學を修む。目するに異端を以てし、口を極めて之を排す。其の弊今世缺舌者流の西洋を艶慕するものと何ぞ異ならんや。心既に父母の邦に背く。幾何か其れ夷狄たらざらん。吁亦盍ぞ其の本に反らざる。

恭しく惟みるに上古神聖規模の大なる殆んど測度すべからざる者あり。後世欽慕鑽仰して餘り有り。之を神習と謂ふ。

蓋し天神の瓊矛を賜ひしは將に以て天地を鎔造せんとせしなり。伊邪那岐命の命を天に承く。將に以て天命を畏るゝの源あるを見さんとす。素盞鳴尊の航海を創めしは、將に以て九夷八蠻を一統せんとす。天照大神の皇孫を降すや。將に以て宇内の主を定

めんとす。武甕槌、經津主神の殘賊を捷伐せしは、將に以て神國尙武の典を遺さんとす。大國主神の天下を皇孫に譲りしは將に以て臣民上に奉るの典を表せんとす。中臣忌部二神の祭祀を司り、以て政事を執しは、將に以て治教を合一せんとせしなり。大名持神の外國を經營せしは、將に以て蠢化の民を教導せんとす。少名彥神の醫藥禁厭を荆めしは。將に以て億兆の天札を救はんとす。保食神の蠶穀を化生せしは、將に以て人民衣食の源を開かんとす。五十猛神の八十木種を播きしは將に以て生を養ひ死を喪ふの材を賜はらんとす。大宮能賣神の君臣を調和せしは、將に以て道德を傳へんとす。大己貴神の幽府を治めしは、將に以て人魂をして憑歸する所あらしめんとす。大年神の年穀

を利したる。國一箇神の金工を創めたる、手置帆、彦狹知神の工匠を防めたる、井神の井戸を掘りたる、竈神の竈を作りたる皆人民の爲に非ざるは無し。生々化々の妙、天御中主神に始まり、八百萬神に終る。

無聲無臭に至つて後ち已む。蕩々たる誰か能く之を名づけん。是れ在上の君子當に取て以て法と爲すべし。然らば則ち神典の妙は是の如くにして止まらんか。曰く然らず。

古言の道義を含蓄する猶ほ漢字の意味を含有するが如きを以て、輕々に讀過す可らず。請ふ、其の略を説かんことを。蓋し古へ天位を稱して、天日嗣と曰ひ、天皇を稱して統尊と曰ふ。是れ天日の胤にして然る後ち、宇内統馭の至尊たる可し。國造

447 四四

を稱して國の御奴と曰ふ。奴は猶ほ家の子と言ふが如し。蓋し天子四海を以て家と爲し、其の諸侯を封建すること、猶ほ家に奴隸あるが如くす。其の君臣の際、貴賤相距ること霄壤の分あり、以て見る可し。古言父より以上、始祖に至るを皆於夜と謂ひ、子より以下苗裔に至るを皆之を古と謂ふ。然れば則ち於夜と謂ひ、古と曰ふは、嘗に父子の謂のみにあらずして、其の血屬の親、永遠に易はらざる以て見る可し。嗚呼君臣の義、父子の親、古の道既に己に此くの如し。是の類を推して以て道を求めなば千言萬語之を左右に取りて、其の原に逢ふ。又何ぞ春秋と論語を假り、以て尊内卑外の典、修身齊家の具と爲さんや。吾故に曰く、古事記の書、大は以て天下を治む可く、小は以て

一身を修む可しと。問者曰く、子の言然り、獨り時勢の不可なるを如何せん。吾れ子の世に容れられずして以て窮死するを憫れむと。曰く志士は溝壑に在るを忘れず、勇士は其の元を喪ふを忘れず。義に志ざすものは利を忘れ、利に志ざすものは義を忘るゝは、自然の符なり。苟くも吾をして一身の利を謀らしめば、散髮窄袖以て礫神の室に出入するも可なり。

何ぞ必らずしも齊門に瑟を執るの迂を學ばんや。然りと雖も吾言をして行はざらしむれば、則ち吾は恐る三千八百萬人の子孫、印度、埃及の覆轍を踏むを免れざるを。嗚呼古事記は三千八百萬人の古事記なり。道明らかならず、天地晦冥なれば、直ちに三千八百萬人を吊すべし、諸人自ら日月を以て無用と爲す

陸、ハニニ
に譬ふんじ、吾家の日月のみにあらざれば、吾は唯其の光明を指示せんのみ。其の用と不用の如きは、我に於て何とせんや。

固本策卷之三

神代紀論上

人にして父無きの人無きは、猶ほ人にして首無きの人無きが如し。人にして首無ければ、以て人と爲す可らず。人にして父無ければ、以て人に伍す可らず。

異なるかな、儒者の神代を論ずる、其の見父無きに出づ。天地剖判の初に、天御中主尊、高皇産靈尊、神皇産靈尊あり。是れ造化の元首なるに、儒者聞て之を異として曰く是れ何たる怪

誕ぞ、吾が經典に無き所なりと。伊弉諾尊、伊弉册尊あり。是れ萬品の始祖なるに、儒者聞て之を笑ふ。曰く海を生み山を生む。聖人之を道はず、何ぞ日本古傳の荒唐なるをやと。天照大神あり、是れ高天原の君主なるに、儒者聞て之を毀つ。曰く大神何者ぞ、上古蒙昧の世仰で以て日神と爲す、笑ふ可きの甚だしきものなりと。正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、天鏡石國鏡石天津彦火瓊杵尊、彦火火出見尊、彦波瀲武鸕草草葺不合尊、是れ何等の名義ぞ、是れ何等の事迹ぞや。之を要するに書契以前に在れば蓋し蛇身牛首の類のみ、亦論辨を費やすに足らずと。是に於てか、大祖を擧ぐれば則ち神武と稱し、帝都を引けば則ち橿原と呼ぶ。擧世茫々神代を六合の外に措て、其の祖宗を視

ること胡越も管ならず。嗚呼儒者の道を知らざる一に此に至る。昔孔丘書を序して、唐虞より斷ち、義農を取らず其故何ぞや。蓋し西土の國たる古より、今に至り、其の姓を易ゆること奕棋も管ならず。人安んぞ其の俗に安んせんや。虞舜の民、唐堯の恩を記せず、夏禹の民、虞舜の仁を知らず。是を以て史氏の權、取捨意に任じ、褒貶筆に隨ふ。

異代の人に何ぞ異代の帝王あらんや。是れ孔丘の容易に唐虞より以下を斷ちたる所以なり。今や儒者神代を以て義農と爲すか。伊勢に大神宮あり、歷朝之を祀るに、未だ義農を以て之を視るべからざるなり。神武を以て大祖と爲すか。神武は業を橿原に創めたまふ者に非ざるに、未だ大祖を以て之を遇すべからざる

るなり。進退據る所なくして、朝秦暮漢の國と之を同視し、以て宗廟の典籍を刪らんと欲す。乃ち孔丘の轍に效ふこと無きか。蓋し孔丘は周人なり、其の文武周公を重んずること至れり。是の意を推すに、之を我神國に生れしめば、吾其の神典を尊崇したるや墳典より甚しくして、二典三謨反て之を高閣に束ね、而して後ち止みたるを知る。予嘗て謂へらく、漢學の神州に入るや、此に二千有餘年にして、人心を益し國俗を敗る。其の弊勝て言ふ可らざるものあり。然れども是れ獨り孔丘の罪に非ず、亦學者の妄なるのみ。

夫れ孔丘は天を敬するを以て、道と爲すものなれば、則ち皇祖天神は以て敬せざるべからず。孔丘は先王を以て宗と爲すものなれば、則ち神皇の典は以て修めざる可らず。孔丘は信にして古を好むものなれば、則ち上世の事以て講せざる可らず。孔丘は尊内卑外の分を明らかにするものなれば、則ち華夷内外の別以て嚴にせざる可らず。孔丘は君父を尊ぶを以て教を立つるものなれば、則ち君に忠に、父を愛するの道を究めざる可らず。道果して是の如ければ、則ち斷々乎として、孔丘の學者に負くに非ずして、學者の孔丘に負くを知る。

嗚呼天下の人をして、神州の神州たる所以を知らざらしめしは、抑も誰の罪なるか。吾日本紀を讀み、神代に眷々たらざるを得ず。故に表にして之を出し、以て世の君子に告ぐ。世の君子其れ亦た後の孔丘たらんものの爲に、笑はるゝ勿れ。

神代紀論中

世の神代紀を讀むもの、多くは神聖の迹を引き、以て仁義孝弟の目と爲す。皆道に昧きもの、言のみ。果して神代を以て道ありと爲さば、則ち坦々たる葦原の國を視て荆棘と爲さるを得ず。

敢て問ふ、何の説ぞ。曰く伊弉諾尊伊弉冉尊俱に夫婦と爲りて萬物を生む。

説者乃ち曰く、二尊天下萬性の爲めに、夫婦の道を立つ。而して普天率土之に由らざるを得ずと。是れ信に然り。しかるに學者獨り夫婦の敗、亦二尊に由るを見ざるか。其の敗を道はず

して、其の成るを道ふ。誰か信にし以て然りと爲すや。

天照大神光華明彩にして六合を照徹す。説者乃ち曰く、是れ無上至尊の神にして、神聖の徳を厥の躬に鍾むと、是れ信に然り。しかるに學者獨り安河原の争は、素盞鳴尊の爲に勝れしを見ざるか。是れ大神の徳未だ議す可きもの無しとせず。大國主神は世の所謂冥府の神なり。説者乃ち曰く、是れ功を顯幽に立つ。天地剖判より未だ此の如き神あらざるなりと。是れ信に然り。しかるに學者獨り彼の八十神に窘しめられたるを見ざるか。是大神も亦未だ容喙す可きもの無しとせず。味鋌高彥根神は、天若彦の喪を吊ふものなり。説者乃ち曰く、朋友の義は當に是の如くすべしとせずやと。しかるに學者獨り其の喪屋を蹶るの暴

舉を見ざるか。死者に何の罪あるや。是れ其の友義に於て未だ
 至れりとせず。凡そ此類の如きもの、指を屈するに違あらず。
 則ち學者の指して以て道有りと爲す所のものは、適以て道無き
 を證するに足るのみ。是れ説者の困しむ所なり。吾意ふに古の
 大事を立つるものは必ず曠世の度有り。曠世の度有るもの、必ら
 ず瑕疵有るを免れず。是れ天地の常理にして、唯人然りと爲さず。
 是故に日月蝕無き能はず、山岳震無き能はず、火は以て數萬の
 屋を焼き、水は以て數萬の人を溺らし、風或は木を抜き、雨或
 は禾を腐らす。是れ日月山岳、水火風雨豈人に益無しとせんや。
 しかして其人物を傷害すること此の如し。然るに人は卒に日月
 山岳、水火風雨を以て、無用と爲す。其の之を仰いで衰へざるも

のは、蓋し小を以て大を廢せざるの理を知ればなり。

夫れ神聖の事之を大にしては、天地を鎔造し之を小にしては
 人事を經理す、盛徳大業世に與に比する者無し、造化の功直ち
 に天御中主神と躡を接す可し。豈區々たる小節を以て之を苛論
 するを容れんや。世儒の堯舜周孔に倂る者、以爲らく聖人に毫
 も過失無しと。是に於てか飾辭粉言、其の不善を揜て以て其の
 善を著はす。學者其の此の如きを見て、心竊かに之を羨む。以
 爲らく吾神聖も亦復た是の如きか。然らずんば以て聖人に敵す
 るに足らずと。乃ち颺言衆に告げて曰く、某神某事を爲す、仁
 なり。

某神某行を爲す、義なり。某神は孝なり。某神は弟なり。殊

に其の仁義孝弟と云ふ所のものは、未だ以て道とするに足らずして、其の行事の意表に出づるものは、決して仁義孝弟の目を以て之を律す可からざるを知らず。豈所謂蓋はんと欲して名章るるものに非ずや。

嗚呼世の君子無蝕を以て日月に期し、無震を以て山岳に期し、無燒を以て火に期し、無溺を以て水に期す。それ亦天地の理に味し。是故に蝕は日月の理にして、震は山岳の理なり、燒くは火の理にして、溺は水の理なり。是に由て之を言ふ。神聖も亦豈過無きの理あらんや。但其の行事磊々落落々尋常と科を同じくせず、其の心胸宇宙を網羅し、六合を包括す。以て其の大を立つる者は、是れ其の後王の模範と爲り、人事の儀則と爲る所以

なり。後の道徳を言ふもの、丈丈して規し、尺尺して度し、寸寸して議し、分分して論せんと欲し、遂に神をして善神なからしめ、人をして善人なからしむ。是れ先づ其の小なる者を修めて、道の遠きもの、徳の大なる者をば、遺れて問ふこと無きが故なり。

深山幽谷必らず巨材大木を生じ、其の高さ千萬丈、上は雲霄に入りて、其の極を知らざるものは、蓋し天然の雨露有りて以て之を養へばなり。人其の材の此くの如きを見て、以爲らく古への所謂英雄豪傑なるもの亦是れ巨材大木の屬のみ。因て三綱領八條目を執り、以て人材を教育せんと欲す。吁亦盍ぞ南宋の覆徹に鑿みざるや。諸を園丁を僦て以て樹苗を養はんと欲する

に譬ふれば、之を掌大の庭に弄するを可とす。期するに棟梁の材を以てせんと欲するも未だし。蓋し嘗て元龜天正の際に考ふるに、猛將勇士奇を出し變に應ずるもの、蓋し孫吳を講ずるの人には非らず。而して文祿慶長の際、忠臣烈士身を殺し主に報ずるものも亦論語を讀むの人に非らず。而して鴻業偉跡彼の如きは何ぞや。他無し、勇武以て事に幹るに足り、廉恥以て國に死するに足り、其の家庭の訓を受くるに、各家聲を墜し、祖先を辱しむるを以て戒と爲す。弓箭を以て文墨に易へず、風俗古へと稍近きが故のみ。嗚呼此を知れば、神代の道を知るに庶からんか。

神代紀論下

慶長四年後陽成天皇詔して日本書紀を刊す。少納言清原國賢之に跋を爲て曰く、日本書紀は歷代の古史なり。君臣此の書を究めざるは莫しと。頃ろ儒佛を學ぶもの夥しくして、神書を知るもの鮮し。物に本末有り。事に終始有り。何ぞ本を棄て、末を取るや。欽惟するに、陛下寬惠叡智、其の流布の廣からざるを惜み、始めて諸を梓に壽す。之れを國に用ひて天下に及ぼさば、以て熙皞の治を成し瑞穂の地を保ち、千五百秋必らず斯に頼るあらんとす。重石丸曰く、嗚呼天の喪亂を降すや久し。藤原氏の專、源平氏の横、承久の亂、元弘の禍、北條氏の逆足利

氏の叛、實に言ふに忍びざる者あり。是れ何に因るか。蓋し上古の世、天子を呼ぶに、現御神を以てし、天子の民を待つに、大御寶を以てす。其の道の皇祖天神に承くる所以のもの、是の如し。是れ其の上下福を蒙むりし所以なり。

西籍入貢するや、質を捨て文に趨り、其の爲す所、唐風を模倣せざるは莫し。

彼の經典は人臣が其の君を放弑するものを以て、曠世の偉舉と爲すもの、之を詩書と謂ふ。

彼の聖賢、王位を農夫に禪るを以て絶代の美事と爲すもの、之を勳華と謂ふ。天子は以て禁とせず、人民は以て諱と爲さず。君臣相率ゐて以て先聖先師の像を拜し、簠簋饗豆。其の前に陳

列して恍然として心既に唐土の域に入り心既に彼に入り、民俗従て變ず。堂々たる神州復た昔日の神州に非らず。

是に於てか、向ふるに現御神を以て天子を視るは、其の己に便ならざるものあれば。心乃ち指すに桀紂の君と爲す。

而して天子の臣民を視るもの、復た大御寶の祖訓を念はず。

君臣日に隔たり、國俗日に漓し。天下治亂の機、既に此に決す。

豈義時高資の輩、湯武の故例を引て、以て皇室を顛覆するの日

を待たんや。帝蓋し此に見るあり。以爲らく王權既に覇府の奪

ふ所と爲る。天下の心唯覇府のみを知て、皇室を知らず。頗る古

道を講明し、以て神尊の統を正しうするに非れば、以て倒瀾を挽

回するに足らずと。其心を設くるや。北畠准后の神皇正統記に

於けるが如けんのみ。是時に當り豊太閤既に薨じ、秀頼猶ほ幼く、徳川家康雄飛の色有り、天下の成敗未だ知る可らざるなり。帝の壽様に區々たるもの、豈果して深算なからんや。然らずんば、戦國争衡の世に當り、期するに熙皞の治を以てす、何ぞ其帝の時を知らざるものとすればなり。在昔皇室の盛んなるや。博士等をして書紀を進講するを以て恒例と爲さしむ。而して漢籍の爲に壓せらるゝや、所謂君臣共に此書を究めしものも、遂に畫餅に屬す。

豈惜しからずや。予嘗て謂ふに、國家自ら神聖の制度あり、故を捨て新を喜び、事大小と無く、法を外國に取るは是れ顛覆の道なりと。徳川氏の政を天下に爲すや、能く帝意を擴充して、

以て古道を講明する能はず。其の極は學者に帝室を廢せんと欲するもの、これ有り。日本夷人を以て自ら居るもの、これ有り。秦伯の子孫を以て、皇統を議するものこれ有り。而して幕府措て問はず。豈唯措て問はざるのみならず、其の意乃ち謂へらく、我邦の文字は漢土より傳はり、人智是に由りて開け、倫理是に由りて明らかなり。工藝是に由りて興り、制度是に由りて立つ。舉世滔々以て文明の世となりたるに、何ぞ其れ惑ふやと。且つ夫れ朝に制度有り、曰く律、令、格、式是なり。而して事多くは神典に本づく。神典に徴せざれば、何を以て之を明らかにせん。鄙儒俗學朝章を諳んせず、所謂祈年、鎮華、神衣、大忌、三枝、風神、鎮火、道饗、大嘗、新嘗、鎮魂、大祓等の大禮の

如き、蓋し夢想だも及ばざる所とす。其の家^{いへ}に在るや、放言^{ほうげん}謾^{まん}辭^じ自ら中華^{ちゅうか}聖賢^{せいけん}の道^{みち}を講ずと謂ふ者、身既^{みみづか}に大逆^{だいつ}大不敬^{だふけい}の律^{りつ}を犯^なし、以て皇室^{くわうしつ}の罪人^{ざいにん}たるを知らず、亦憫^{あはれ}れむべし。然りと雖も國に罪人あるは政府^{せいふ}の罪^{つみ}なり。嗚呼^{ああ}帝書^{ていしよ}紀流布^{きりゅうふ}の廣^{ひろ}からざるを惜^{おし}み、即ち天下^{てんか}に罪人^{ざいにん}なからしめんと欲^ほす。其の仁大^{じんたい}なりと謂ふ可^べし。天下^{てんか}に苟^{なほ}くも罪人^{ざいにん}無ければ、刑措^{けいそ}を用ひざるも可^べなり。熙皞^{きこう}の治^ちも亦豈^{また}信^{まこと}に茲^{こゝ}に在らざるか。

固本策卷之四

祝詞式論上

祝詞式^{のりごしき}は政事^{せいじ}の書^{しよ}なりや。巫祝^{ふしやく}の書^{しよ}なりや。政事^{せいじ}の書^{しよ}なれば、

巫祝^{ふしやく}の如^{ごと}きは講^{こう}せざるを可^べとす。巫祝^{ふしやく}の書^{しよ}とすれば、何^{なに}すれぞ之^{これ}を延喜^{えんぎ}の式^{しき}に列^{れつ}せしや。二者^{ふたに}判^{はん}せざれば、天下^{てんか}の學者^{がくしゃ}泛々^{はんげん}然^{ぜん}たる彼^かの舟流^{ふねなが}れて届^{とど}く所^{ところ}を知らざるが如^{ごと}し。

予^{われ}世^よの祝詞^{のりご}を講^{こう}ずるものを観^みるに、多くは巫祝^{ふしやく}の流^{りゅう}となれり。是^{こゝ}れ豈^{また}祝詞^{のりご}を知るものならんや。問者^{もんじや}曰^いく、巫祝^{ふしやく}の祝詞^{のりご}を誦^{じゆ}する、是^{こゝ}れ其^{その}の職^{しやく}なり。異^{こと}なるかな、子^この論^{ろん}を發^{はつ}すること。抑^{おさ}も子^こは別^{べつ}に見^みる所^{ところ}ありやと。曰^いく、噫^{ああ}、世衰^{よせう}へ道微^{みちび}にして巫祝^{ふしやく}の學興^{がくきよ}る。世^よには巫祝^{ふしやく}の徒^たの章句^{しょうく}を摘^つみ器物^{きぶつ}を考^{かん}へ、喋々^{たつたつ}祝詞^{のりご}を講^{こう}ずる者を觀^みて、以て神道^{しんたう}となす。神道^{しんたう}はこれに由^よりて鄙^{いひ}めらる。甚^おだしきかな。紫^{むらさき}の朱^{しゆ}を奪^{うば}ふこと。

蓋^かし人道^{じんたう}は祭祀^{さいし}より大^{だい}なるは莫^なし。祭祀^{さいし}は王道^{わうたう}なり、決^{けつ}して

巫祝の私す可き者に非ず。何ぞや、曰く天子は祭を主どり、巫祝は特に籩豆の有司のみ。祭祀の巫祝に属せざる祝詞の文を見ても靚らる可し。夫れ政の言たる祭事なり。祭事の義たる政なり。

祭は政教の根本たり。根本立てば、諸政舉る。是故に我上古の世、祭を以て政と爲し、政を以て祭と爲す。祭は以て教となり、教は以て治となる。祭政一致、治教合一、無爲の化、不言の教、是に於てか成る。天地の初めて判るゝや、神ありて之を造る。人の始めて生るゝや、亦神ありて之を造る。天地は神を本とし、人亦神を本とす。天子本に報ひ、人民之に倣ふ。祭祀の道固より已を得ざるに出づ。天子は天下の父母となり、政を

天下に爲して、天下の子弟をして各其の本を祭らしむ。

人各其の本を祭らば、

國に不忠の臣無く、家に不孝の子無く、風俗の美亦宜からずや。祭は政と固より科を同じうせず、治は教と亦勢ひ岐れざるを得ずとて人或は此を以て之を駁するものあり。曰く是れは西洋異域の例を引て、以て我上古の制を疑ふのみ。飯匙の矩亦何ぞ論ずるに足らん。祭祀の義、事固より多端なり。其の大なるものに就て之を論ずれば、天下の生は久し。而して人、祖に本づかざるは無し。

則ち祖先の業、子に非ざれば其れ誰か之を繼がん。人道の不孝後無きより大なるは莫し。

後無ければ不祀となる。苟くも不祀の不孝となるを知らば、祀の人道第一たる、毫も疑を容れず。天下に君臣なるものあり、君は令を出し、臣は之を行ふ。刑賞予奪の權を執り、以て我に臨み、以て吾公衆を安んず。其の歸する所、將に以て吾公衆をして先祀を奉せしめんと欲するに過ぎず。天下に父子なるものあり、父は慈に子は孝に、一家和樂す。其の歸する所、將に以て先祀を保護せんと欲するに過ぎず。天下に兄弟なるものあり、内は牆に聞ぐの言ありと雖も、外其の侮を禦ぐものは、其の歸する所、將に以て手の如く足の如く、先祀を墜さざらんことを欲するに過ぎず。天下に夫婦なるものあり、子を生み孫を長ず。其の歸する所、將に以て血統連綿として、先祀を奉せしめんと

欲するに過ぎず。天下に朋友なるものあり。善を責め益を求め、道徳を研究す。其の歸する所、將に以て名を揚げ家を興し、以て先祀を繼がんと欲するに過ぎず。

是故に觀花賞月は祭祀の餘澤なり。客を招ぎ賓を宴するも、亦祭祀の餘澤なり。井を鑿りて飲み、田を耕して食ふ、細大の事祭祀の爲ならざるものは無く、亦祭祀の餘慶ならざるものは無し。世の君子慮深遠ならず、所謂君臣父子、夫婦兄弟朋友なるものを以て、當然の道と爲し、其の君臣父子、夫婦兄弟朋友なるものは、特に天下の公衆をして各先祀を無窮に安んせんが爲に之を設くるの具たる所以を知らず。

古の人飲食を菲して、孝を鬼神に致す者あり。世以て美談と

爲す。しかるに何ぞそれ今人の薄なるや。今夫れ父歿して子こ
 れを祭るは、家道の常なり。黍盛籩豆、酒饌弊帛を具へ、以つ
 て指揮に供ふるは、婢僕のことなり。主人道を失なひ、婢僕代
 つて祭るは、家政の衰へたるなり。豈祖先の祀を蔑しるにす
 るに幾からずや。世の禮を鬼神に失するものに貴賤と無く一な
 り。昔王道の盛んなるや。天子親ら祭り敢て之れを巫祝に專委
 せず。巫祝の籩豆に従事するものも亦た天子の盛意を神明に達
 せんと欲するに過ぎざるのみ。今の學者此の意を知らず。巫祝
 の籩豆に従事するものを視て、以て王政と相關せざるものと爲
 し、遂に官國幣社を以つて無用の長物と爲す。天下の大道蕩然
 として地に墜ち、誰か復た祭政の岐ること、實に天下治亂

興亡の大機關と爲るを知らんや。嗚呼學者の見る所、彼の如く、
 政事家の論する所、彼の如く、天下衆庶の云ふ所。彼の如し。
 是に於てか、笠の乞子、洋の磔鬼、唯意の嚮ふ所のまゝに、乘
 するに以て己の私を營まんと欲し、人心潰裂、禍殆んど測る可
 からず。

憂世の士或は云ふ、世勢此に至る、佛を以て國教とせざるを
 得ずと。或は云ふ、耶蘇を以て國教と爲さば、國必らず鞏固な
 らんと。或は云ふ、神道各派の相分れるものを合して、以て己
 の地に爲せと。皆本を知らざるもの、論のみ。必らず俗士の言
 ふ所の如くんば、國體果して何くに在るや。予竊に謂へらく、
 之を救ふには他術なし、唯本を治すべしと曰はんのみ。本とは

何ぞや、曰く禮なり。天孫の降臨するや、天神授くるに天都詞
 大詞事を以てす。是を見るも祭政一致の大法を以て、天孫に口
 授せられしなり。其の禮たる亦至大ならずや。世の祝詞を講ず
 るもの、巫と爲り祝と爲る。吾れ何ぞ知らん。明明たる神漏義、
 神漏美命下に臨み赫たり。吾は則ち断然として、天都詞大詞事
 を取り、定むるに以て經國の大法と爲さんのみ。

祝詞式論中

高天原は神國の元氣なり。神國の神國たる所以は、高天原あ
 るを以てなり。

苟くも高天原無ければ、是に神國も無し。夫れ高天原は上帝

の居る所、神國の事一切高天原に原づかざるもの無し。

是故に國を神國と曰ひ、人を神裔と曰ひ、書を神典と曰ふ。

天子即位の初政、神に告げ民に令するの詔、亦必らず之を高天

原に繋けて、以て其起元を明らかにし、國體を慎しむ所以なり。

今夫れ匹夫匹婦の家に、猶ほ系譜あり。父祖より以上高祖の事

に溯りて子孫之を識し、隣里之を敬し、郷黨之を重んず。

苟くも言、家譜を饒すものあれば、佛然として怒り以つて其

の冤を雪ぐ、否らざれば則ち孝を父祖に失ふものと爲す。是れ

人の至情なり。故に曰く高天原は神國の元氣なり。其の國家盛

衰の運に關すること、之を匹夫匹婦の家、榮辱を隣里郷黨と争

ふものに比すれば、固より日を同じうして語るべからざるなり。

蓋し高天原尊とければ、則ち神尊とし。神尊とければ、則ち帝室尊とし。帝室尊とければ、則ち神亦尊とし。神尊とければ、則ち高天原亦尊とし。帝室の高天原と未だ相須ひて以て、輕重をなさざるなり。方今浮躁伶俐の士、齷齪自らを智とし、其の見る所を以て其の見ざる所のものを疑ひ、傲然として以て爲へらく、是れ古の寓言のみなりと。空論浮辭盡く之を洋説に徴し、遂に人祖を認めて沐猴の化する所と爲すに至る。帝譜を誣ふるに、以て殊方異域の種に出づると爲す。亦何ぞそれ頑なるをや。兵法に敵の美を談するを忌むは、其の兵氣を餒さんことを恐るゝによるなり。齋藤實盛軍に在り、盛んに敵兵の強を説き、兵氣沮喪せり。是に於てか、富士川潰走の事あり。

今や國家の赤子自ら高天原の盛事を毀ち、以て洋種の美を誇稱す。其の元氣を損すること、實盛敵兵の盛んなるを談するよりも雷ならず、則ち堂々たる神國安んぞ他日土崩瓦解し、言ふべからざるの變無きを保せんや。人心の一ならざる、風俗の齊はざるは國の大害なり。今夫れ人心を一にし、風俗を齊へんと欲すれば、古典を用ひ以て古道を明らかにするに如かず。古道明らかなれば、人に邪路の迷無く、古典行はるれば、國に横議の士無し。人の上と爲るものにて向ふ所を知らざる可らず。朝政の世には學流萬派人々論を異にし、國々制を別にす。禪讓の美を談するものこれ有り、放伐の義を稱するものこれ有るに、未だ嘗て忌諱するを知らず、以て聖人の道我に波及するものと爲

せり。殊に知らず、是れ背反の心を未萌に養ひ、以て兵を樹つ
 るのみ。卒に政教相岐れ、上下相猜み、動もすれば湯武の跡を
 引き、以て天子を議せしめき。其の弊猶ほ洋學共和自由説の今
 日に於けるが如し。我が上古神聖の國を建て制を設くる是の如
 く迂ならざりき。

夫れ神の天地を造る當時の事皆其の親しく視て目撃する所な
 り。此を以て皇孫に授く、即ち所謂天都祝詞なり。皇孫之を受
 け、紹述して懈らず。貴きを三器に準ず。蓋し記紀は猶ほ題の
 如く、祝詞は猶ほ歌の如し。歌と題と未だ嘗て相矛盾せず。歌
 を視て題を知り、題を讀みて歌を解す。稽古の道を然りと爲す。
 而して祝詞の辭、言々偽り無く、句々誠を陳ぶ。以て鬼神を泣

かす可く、以て民人を感じしむ可し。猶ほ上古の歌、情を吐き
 實を言ひ、側々人を動かす、後世の歌と科を同じくせずして、
 天子之を神に報する所以の義盡く。

嗚呼儒教、佛教、耶穌教は、皆人の捏造する所なり。しかる
 に我神典に至りては、神を以て神を祭り、誠を以て誠に報ゆ。
 復た斧鑿の跡を見ざるなり。

罪あれば則ち之を祓ひ、穢あれば則ち之を清め、徳あれば則
 ち之に報ひ、災あれば則ち之を禳ふ。是れ皆當然の理にして人
 事の常なり。聖王之に遵ひ明主之を行ひ、以て天下を治む。其
 の心を設くるや、八十綱を以て四海萬國を引くの語に至り、以
 て極度と爲し、而して止む。其の規模たる豈大ならずや。

朝廷既に之を以て民に臨む。民の朝廷を視ること、猶ほ天神を視るが如し。是れ民の高天原を信じて疑はざる所以なり。聞くが如くんば、昔西土に五絃の琴を弾じ、南風の詩を詠じて天下を治めたるもの有り。今平心和氣にして古を稽へ、以て祝詞を誦すれば、祥風瑞氣霽々として几案の間に起るを覺ゆ。嗚呼三千八百萬人の心を集めて、一人の心と爲し、以て斯道に従事せしむれば、五絃南風の歌も、豈言ふに足らんや。五絃南風の化も、豈論するに足らんや。

祝詞式論下

軍國の諸政、法を神代に取り、威を神明に借るは、天下長久

の本なり。曰く徴あるか。曰く有り。天孫の降臨するや、神漏義、神漏美命授くるに、天都詞、大詞事を以てす。豈人事の儀則に非ずや。凡そ事は、源頭を詳にせざれば以て遠きに行ふ可らず。古への朝廷の禮の如き、悉く法を天上の儀に取るは此が爲めの故なり。今廢を興し絶を繼ぎ、以て國體を振起せんと欲せば、宜しく法令を一新し、以て人民の耳目を警醒すべし。何をか、人民の耳目を警醒すと謂ふか。曰く、天皇皇祖天神を齋場に親祭し、以て大孝を申ぶ。宜しく神武天皇鳥見山の例に依るべし。夫れ天御中主神は惟祖惟宗なり、其の尊きこと二無し。天照大神の尊を以て、猶親しく新嘗を爲し以て之を祭る。神武帝祖徳を追念す、故に之を報賽し、其の之を天社國社の列に加

へざる、亦以て其の特禮を見る可し。蓋し崇神帝の世に、天照大神を倭笠縫の邑に遷し、爾來伊勢大神を奉崇するを以て事と爲す。而して鳥見山の例絶へて聞くこと無し。豈大闕典ならずや。今夫れ洋匪の耶蘇を奉ずる、傲然として我に臨んで曰く、彼の伊勢大神宮は何物ぞ。太陽は空中の一大燈なるのみ。我造化の眞神製して以て衆庶を恵む。何ぞ以て之を神とするに足らんやと。聞く者察せずして眞に以て然りとす。殊に知らず、我天御中主神は即ち是れ造化の主神にして、我天皇は奉じて以て宇内に君臨する所なり。今果して此の大禮を明らかにすれば、豈唯大八洲の民、耳目を一洗するのみならんや。五大洲の民亦目を拭ひ以て、我日域の光を仰がんとす。曰く是の如きのみか。

曰く否。軍中宜しく軍神を祀るべし。何をか軍神と謂ふ。曰く武甕槌神、經津主神是なり。師出づれば則ち祭り、凱還すれば則ち祭り、慶あれば則ち告げて以て之を賞し、罰あれば則ち告げて以て之を斬る。暇日には則ち二神の功德を講じ、以て之を飽聞せしむれば百萬豺豕の士、將に王事に死するの榮を知らんとす。曰く是の如きのみか。曰く否。宜しく大祓の式を明らかにし、以て刑法を制るべし。國家既に大祓有り、又何ぞ式を講せんやと。曰く未だ全からざるなり。夫れ祓は其の罪を祓除し、以て神明に謝せんとするなり。是故に死刑、贖刑、自首は、皆是れ祓のみ。大祓の刑法と固より其の趣きを異にせざれば、以て之を別つ可からざるは理の當然なり。蓋し刑死は、死を以て罪

を謝するなり。贖罪は財を以て罪を謝するなり。自首は自首を以て罪を謝するなり。既に罪を謝す。而して刑各當る所有り。是に於てか、祓以て之を清め、死者は其の靈以て安んじ、生者は其の魂以て清められ、以て全人と爲るを得。是れ大祓の道なり。然らざれば、所謂母を好し子を好するの罪を以て、祝詞を唱へ以て之を祓ふも徒法のみ。太古朴なりと雖も、豈是れ迂遠の事有らんや。素盞鳴尊の髪を剪り、爪を抜きたるが如き、以て其の徒法に非ざるを徴す可し。今果して此の法を用ふれば、天下億兆の民、將に天地神明の欺く可らざるを知らんとす。曰く是の如きのみか。曰く未だし。官民の葬祭宜しく一切を神代の式に依るべし。子を以て父を祭るは、古今の通義なり。又何

ぞ疑はん。朝廷既に定禮あり、法律を嚴にし以て之に臨み、遠ふ者は罰ありとし公卿は流に處せられ、士は自盡を賜ひ、庶人斬に當る、亦一時の宜なり。果して此の如くば、天下復た不孝の子無し。然らば則ち是の如きのみか。曰否々、猶ほ言はざる可らざるあり。宜しく特に出雲大社を尊崇し、一切を皇祖天神の詔に遵ふべし。宮殿未だ古に復せず、人民未だ信を知らず。而して生死の海、茫として畔涯なく、朝廷慈航を出し以て之を救ふを仰がざるを得ず。果して是の如くば、則ち天下の民、庶幾くは顯幽の二途に迷はず。然らば則ち是の如きのみか。曰く猶ほ未だし。宜しく閭巷の小民をして、戸籍を産土神社に納れしめ、以て之を統轄すべし。子生るれば告げ、人死すれば告ぐ。

旅行すれば祭り、郷に歸れば祭る。神符を社に受け、以て護身の聖と爲し、姓名郷貫年齢を符に書し、以て信と爲し、符を失ふ者は、之を官に急告し、以て更に符を乞はしむべし。神符を偽造する者には罰有り、符を帯ぶるを肯んせざる者は斬に處せらる。果して是の如くば、其の溝壑に轉死するものと雖も、以て其の郷貫姓名を審かにすべく、況んや亡命をや。

大凡以上論する所、天下の諸政之を祭祀に寓し、以て人民の耳目を警醒するもの大略此の如し。而して事天都詞太詞事に原づかざるものは無し。蓋し上世簡易なりしが故に祝詞亦頗る簡易なりき。故に今其意を敷衍し、引て之を伸ばし、類に觸て之を長くし、以て之を軍國の用に施さば、亦以て神漏義、神漏美

命の神意を祖述する所以なり。もし徒らに古例に拘泥して、必らず、古に是事無しと曰はば、恐らくは膠柱刻舷の腐態を免れざらん。其れ何を以てか祝詞式の經國の大法と爲るに在らんや。

固本策卷之五

萬葉集論上

大日本の人を大日本國に造らんと欲する者は、大日本の言を知るより善きは莫し。大日本の言を知らんと欲する者は萬葉集を誦するより便なるは莫し。或人問ふ。大日本には既に人有り、何ぞ人を造ると謂ふか。曰く世に善く古事記を讀むものありや。曰く未だし。世に善く神代紀を讀むものありや。曰く未だし。

曰く記紀は大日本の古史なり。記紀すら且つ讀む能はずして以て其祖を誣ゆ。之を大日本の人と謂ふを可とするか。今の書を讀む者、漢籍洋書より始むれば、則ち其の腸漢人なるのみ。其の心洋人なるのみ。漢洋の腸を以て記紀を讀む。文義晦澁、意味豊ならず。宛として墙面の人の如し。甚しき哉、言語の國家に急なるや。夫れ漢籍とは何ぞや。漢文を以て虞夏商周の事を記載する者これなり。而して虞夏商周、歐米各國の人は、皆各自國の語を以て自國の事を學ぶ。入り易く知り易く、悟り易く解し易し。故に其の學士徳を成し材を達す。卓然として觀る可き者あり。且つ支那に歐米各國の學無きに非らず。歐米各國に支那の學無きに非らず。然れども未だ嘗て自國の學を捨て、力

を外國の學に專にせるものあるを聞かず。獨り我神州是に異り其の士、學を養ふや、此を捨て彼に従ひて國に背き、祖を誣ゆるの人盡く庠序に出づ。吁、何ぞ其れ古今賢哲の士の國を謀るに昧きや。老狐の人を魅する。必らず先づ氣の虛に乗じて之に憑る。氣虛ならざれば老狐も何するものぞ。古人の漢學に酔ひ、今人の洋學に溺れたる、蓋し其の自國の學を忘るゝに因る。乃ち氣虛の老狐を招ぐと類を同じくすることなかれ。予漢洋學者の爲す所を視るに、則ち惴々然として首を低くし、膝を屈して媚を外國の奴に獻するを務と爲す。狐憑に非ずして何ぞや。然らすんば翻然として蹶起し、以て國威を振ふの道を思はざらんや。世の洋學を憎む者。未だ漢癖を免れず。而して周孔を談

する者、甘んじて周孔の奴隷と爲る。之を要するに五十歩を以て百歩を笑ふの人なり。決して之を純然たる大日本の人と謂ふを得ず。吾れ意ふに、言語の道古人之を重んず。古言明らかならざれば、古書以て講すべからず。是故に言語の道を明らかにして、後ち神皇の典を詳にすべし。神皇の典詳らかなるべくして、後ち謂ふ所の大日本魂立つ。嗚呼大日本の國、大日本魂の人無きや久し。故に今新たに大日本魂の人を造らんと欲せば、他術無し。惟固有の賦性に從つて、以つて言語の道を講せよと曰はんのみ。神州の言語は古歌に存す。古言の叢は萬葉集之れを最となす。初學の士以て誦習せざる可らず。誦習の久しき、日に記し月に誦んずれば、習ひ性と成り、古言を視ること猶ほ

俗言を視るが如し。學問の道何ぞ訓詁を假らん。豈至便ならずや。

吾れ世の漢字を學び、洋語を習ふものを觀るに、佶屈聲牙、侏儻缺舌尤も以て歲月を經過せざるべからず。心を苦しめ、思を焦す。蓋し亦勞するをや。噫豈管に心を苦しめ、思を焦すのみならんや。其の心術を冥々の中に傷ましむること尠からず。古事記、神代紀の如きは然らず。其の書盡く假名を字傍に付け、書に險字なく、文に澁句無し。其辭耳に入り、心に通じ、蠶戸蝻丁すら苟くも四十七字を識るものは、期月以て天人の大道に通ずべし。况んや縉紳の士をや。今より以往朝野に復た蠻音漢語以て、其鴈を腐敗するの人を有らしめず。且つ夫れ萬葉集の書

たる、字は漢なりと雖も、辭は即ち假名なり。幼童稚女の萬葉集に従事すること、所謂百人一首を誦する如くすれば、其の學たる、これより易きは莫し。事は易きに在りて、諸を難きに求むるは、學者の通病なり。吾故に曰く、大日本魂の人を造らんと欲せば、言語より始め、言語の道を知らんと欲せば、萬葉集より始むべし。然りと雖も吾れ世の萬葉集を治むるものを觀るに、終身役々語學に拘泥し、技此に止まるのみ。曾て神典の何物たるを知らず。其の言猥瑣にして、其の行ひ鄙劣なり。源語を以て枕と爲し、花柳を以て伴と爲し、毫も天下國家を益するものなし。吾れ豈此を以て後學に望まんや。果して此の如くんば、則ち亦惡ぞ其の大日本の人爲るに在らんや。

萬葉集論中

或人曰く、萬葉集は古言の叢爲る事は吾既に命を聞くを得たり敢て問ふ、集の益此に止まるかと。吾之に應へて曰く、然らず。萬葉集を讀まば其の益或は歴史よりも多しと。曰く萬葉集は零々碎々一時の矢口のみ。何ぞ其の益歴史より多しと謂はんや。曰く聲無くして形有るものは畫なり。形無くして聲有るものは歌なり。畫は無聲の形なり。歌は有聲の畫なり。無聲の形之を瘖啞に寫し、有聲の畫之を精神に傳ふ。古の歌を詠ずるもの、其の言自然に出で、絶へて假設の事無し。其の平生言はんと欲するの言、時に臨み感に觸れ、永言して之を發す。其の言に曲

節あり、以て人耳を悦ばす。故に心の言に發するものは、歌より眞なるは莫し。言の人に感ずるは、亦歌より善きは莫し。古人是を以て心を傳へ、今人は是を以て古を知る。歴史に非らずして何ぞや。且つ夫れ歴史は他人の筆を以て、他人の跡を述ぶる者なり。其事或は想像に出づ。而して其の心或は未だ必ずしも然らざるものあり。歌は自己の口を以て自己の心情を吐くものなり。其の眞たる天に出でて人に由らず。作者死すと雖も、心情は死せず、以て萬世に傳ふ可し。豈歴史の眞なるものに非らずや。而して歌の叙列する所、其の倫は君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、賓主、男女、其の事は則ち歌舞、戦闘、飲宴、葬祭、羈旅、慶賀、哀傷、叙懷、存問、餞別、祥瑞、之を上にするれば則ち天

地、風雨、日月、星辰、寒暑、霧露、煙霞、霜雪、雷霆、の變有り。之を中にすれば則ち山川、湖海、道路、坂嶮、林野、郊坰、春花、秋葉の樂有り。之を下にするれば則ち神社、佛寺、堂塔、伽藍、宮殿、樓閣、仙家、田舎、鳥吟、鹿鳴の事有り。而して四時の觀天地の美備はる。之を歴史の寫眞と謂ふに、其の誰か然らずと謂ふや。

もし夫れ忠孝の辭、淫奔の篇、漢土の故事、佛氏の舊套並採互録して、玉石混淆するもの、譬へば造化の萬物を遺さずして、以て人目を悦ばすが如し。其の意智を開く亦大ならずや。然らば則ち集の益は此に止まるか。曰く然らず。古の人言語の道を善くするが故に、其の辭雅訓、諷詠志を述べ、言ふ所古に合し、

以て風俗を冥々の中に養ふ。東歌及び常陸國防人歌の如き、以て國の光を観る可し。學者知らざる可らず。何をか東歌とは謂ふ。曰く昔は天祖の民命を重んずるや、齋庭の穂を皇孫に願ち、以て之れを下土に播き、躬自ら新嘗を爲し以て其の本に報ゆ。是れ國名の瑞穂爲る所以にして、朝禮の新嘗ある所以なり。而して匹夫匹婦の言を發するや、造次も敢て戒愼恐懼の意を忘れず。何ぞ其の古俗の忠厚を存するを。萬葉集東歌に云はく、
たれぞこのやのとをそふる

にふなみに

わがせをやりていはふこのとを、

何をか防人歌とは謂ふ。曰く昔は鴻荒の世、暴神邪鬼中國に

充満し、以て皇化を妨ぐ。是に於てか、武甕槌神を降し以て之を平定す。武甕槌神跡を鹿島に留め、神威赫々として千歲在すが如し。故に人民の王師に従ふもの、敢て屍を山海に擲つるを忘れず。何ぞ其れ古俗の勇武を存するを。萬葉集常陸國防人歌に云はく、

あられふりかしまのかみを

いのりつゝ

すめらみくさにわれはきにしを、

然らば則ち大道の古歌に存すること之を東歌に徴すれば彼の如く、之を防人歌に驗すれば此の如し。決して忽諸にすべからざるなり。嗚呼東歌をして之を天下に擴めしむれば、則ち以て王者

皞々の民を今日に見るべく、防人歌をして之を闔國に擴めしむ
 れば、則ち弘安の風濤も豈言ふに足らんや。歌の國家に裨益ある
 ことは是の如し、亦何ぞ憚て弘めざらんや。是故に軍陣にも歌を
 以てし宴集にも歌を以てして君臣の情通じ、賢愚の性見はるる
 は古の道なり。然らざれば戎馬倥傯の際を以て、神武帝歌を伊
 那佐の山に發し、震怒斬首の威を以て、雄略帝刀を三重姪の歌
 に擲つ。豈果して謂れ無しと爲さんや。紀貫之曰く、歌は天地
 を動かし鬼神を感せしむと。噫、信なるかな。

萬葉集論下

吾れ萬葉集を讀み、然る後ち詩の以て廢す可きを知る、詩の

以て廢す可きを知り、然る後ち萬葉集の益々尊きを知る。儒者
 曰く、詩は孔丘の重んずる所。故に曰く、小子何ぞ夫の詩を學
 ぶことなきといへり。詩の果して廢す可んば、何すれぞ之を勸
 めたる。曰く是れ乃ち詩の以て廢す可き所以なり。何ぞや。曰
 く神州には自ら神州の言語あり、漢土には自ら漢土の言語あり。
 永言して之を發すれば曲節あり、音調あり是即ち歌なり。歌と
 言語とは析て別つ可らず。析て別つ可らざれば、詩は漢土の歌
 なるのみ、豈廢せざるを得んや。諸を春林の嚶々、秋山の呦々、
 牛犢の牟々、蜚虫の唧々に譬ふるに、各其の音當る所あり。以
 て其の友を呼ぶ。牝牡あり、雌雄あり時に感じて情を動かすは、
 歌の道なり。然りと雖も嚶々は蜚虫の伴に非ず。呦々は牛犢の

侶に非ず。鳴鹿をして牟々を聞かしむれば、亦猶ほ啼鶯をして
 啣々を聞かしむるが如し。之れ均しく聾なるのみ。是れ其の意
 哀まざるに非ず、其の情深からざるに非ず。然れども物類を同
 じくせず、言語通せざるの然らしむるなり。是に由りて之を言
 ふ。詩の神州の人に用ゆべからざるは猶ほ歌の漢土の人に用ゆ
 可らざるが如し。假ひ其れを能く通せしむるとも、僅々百人中
 の一人なるのみ。之を無用と謂はざるを得ざるなり。吾れ世の
 詩を作るものを觀るに平仄の正、韻字の叶勤むと謂ふべし。然
 れども其の言徒らに漢人に擬し、試みに之を小人女子の前に於
 て唱ふ。鳥言禽語と奚ぞ擇ばん。吁、亦盍んぞ神州の語を用ひ、
 以て詩を作るの法に代るを思はざるなり。蓋し詩の用たるや、

要は漢人の耳目を悦ばすに過ぎず。其の風教に益なき固より論
 無きなり。嗚呼、豈嘗に益なきのみならず、愚も亦甚だしきなり。
 何となれば日夜思を焦し、險韻奇句以て其の腹を漢にすればな
 り。地名を問へば曰く、楚水吳山、人物を問へば曰く、李白杜
 甫。芳野泊瀨、人丸赤人を問へば曰く、吾れ知らずと。もし假
 に孔丘をして洋樂を聞かしめば如何。三月肉味を忘るゝに至ら
 んや。しかるに儒者此の義を思はず、豈迂遠の極ならずや。
 蓋し詩の盛んなるは漢學の盛んなるなり。漢學の盛んなるは
 皇道の衰へたるなり。天智帝の時に當り、大に唐風に擬し、此
 を以て天下を釐革す。而して大津皇子の詩賦を作る、亦此時に
 生まれり。一葉初めて下り、天下秋を知る。乃ち之を神州の忝

離なりと謂はざるを得ず。儒者曰く、詩を作るが如きは管公も亦之を爲す、何ぞ國に害あらんやと。曰く予は名を以て人を取ることを欲せず。且つ管公の事の如きは、之を漢才と謂ふを可とす。之を和魂と謂ふは未だし。蓋し公は延喜の聖帝、式を制り格を作るの世に在り。大義を唱へて以て異端を攘斥する能はず。舉世佛に依れば、佛に依り、儒を好めば儒を好み、而して聖帝百官をして相率ゐて、以て漢聖蠻佛の前に拜趨せしむ。則ち今日神州陸沈の俗を馴致せしは、所謂王夷甫諸人其の責に任せざるを得ず。公の詩に巧なる其の跡知る可きのみ。曰く然らば則ち詩は盡く廢すべきか。曰く吾を以て之を觀るに、漢學も猶ほ廢す可きなり。況んや詩をや。詩に代ふるに歌を以てすれば、即ち詩

を作る所以なり。子獨り所謂小唄、淨瑠璃、能、狂言、芝居の類を見すや。皆歌なり。詩には非ず。而して其の以て愚俗を鼓舞する所其の功用彼の如く、復た説教演説の比に非ざるなり。今夫れ天下の人をして盡く萬葉集を誦せしめ口は萬葉の口爲らしめ耳は萬葉の耳爲らしめ腹は萬葉の腹と爲らしめ俗は萬葉の俗爲らしめ人々諷詠し、古言を見ること、猶ほ俗言の如くなれば、則ち復古の政得て施す可きなり。所謂小唄、淨瑠璃、能、狂言、芝居の類は、漸を以て之を革ため、樂章を作り以て之を廟堂に用ひ、之を軍國に施さば、其の天下を陶冶し、黎庶を蒙諭して神州金湯の固めを成す所以の者は、實に是に在らんとす。

固本策附録

讀論語上

天下の事、理有り、勢有り。理は勢を制す可らず、勢は理を存す可らず。吾れ論語を讀み、然る後ち以て之を知る有り。蓋し理を見て勢を推し、勢を見て理を考ふれば、則ち神州の毒物未だ論語より劇しき者はあらず。何をか理は勢を制すべからずと謂ふか。曰く彼孝弟忠信の目を立て、以て人に教ふ。禮樂刑政の法を設け、以て世を経す。君子小人の別を甄にし、以て方を定め、天に事へ、祖を奉ずるの義を明らかにし、以て政を修む。華夷内外の分を正して、以て國を紀す。禮義廉恥の教を設

けて、以て俗を勵ます。誰か之を倫理に非すと謂ふか。倫理既に此の如し。我利して之を用ふ。果して國に害無きか。曰く然らず。聖人の神州に於ける猶ほ鴉片の支那に於けるが如く、病ひ骨髓に入り、人々自ら其の己の累と爲るを知らず。何ぞや。凡そ我臣民の彼に學ぶものは、所謂堯舜禹湯文武周公孔子を仰ぎ、以て天人鬼神と爲し、皆曰く孝弟忠信、是れ吾が聖人の教なり。禮樂刑政、是れ吾が聖人の制なり。君子小人の別、是れ吾が聖人の設くる所なり。天に事へ祖を奉ずるの義、是れ吾が聖人の創むる所なり。華夷内外の分、吾が聖人既に之を定む。日本の東夷たる誰か敢て之を議せん。禮義廉恥は日本に無き所なり。聖人微りせば吾は其れ野蠻とならんのみ。大抵儒者の言ふ

所、期せずして同じ。是に於てか、天下民心の彼に向ふもの、譬へば水の下に就くが如く、大勢滔々として復た回すべからず、是れ其の書たる日用常行の理を言はざるに非ず。しかるに儒者の講ずる所、虞夏商周に非れば、即ち唐宋元明、神州祖宗の典の如きは措て問はず。學問徒らに海外の笑と爲る。豈宇内の怪事、人間の奇辱に非るか。而して舉世茫然として、悔悟を知らず。是れ之を理は勢を制すべからずと謂ふなり。何をか勢は理を存すべからずと謂ふか。曰く鳳凰朝陽に鳴き、冬嶺孤松秀づ。聰明特達の士、何の世にか之れ無からん。但し世の昏迷せること既に已に此の如ければ、則ち其人疾呼大聲し、以て之を警醒せんと欲し、或は之を書に筆し、或は之を言に發す。以爲へ

らく周公仲尼の人を教ふるは、決して是の如くならずとて、引くに春秋を以てし、徴するに論語を以てし、以て我が神皇の道を諭せども而も聞くもの省みず。哀として充耳の如し。諸を水を掬して猛火に投ずるに譬ふれば、火勢熾々として雷に救ふべからざるのみならず、反つて或は之を激動し、遂に忠君愛國の人をして世に容れざらしめ、目するに以て異端邪説と爲すに至る。豈所謂魚目を玉と爲し、正宗を鈍と爲す者に非ずや。是れ之を勢は理を存すべからずと謂ふなり。

隣家に父有り、其の人甚だ聖にして欣々笑を含み來り、我室に入り教ふるに孝弟の道を以てす。其の子察せずして以て隣父を吾が父より賢なりとし、而して之を親愛し、終に其の子不孝

の子となる。是れ隣父の聖ならざるにあらず。然るに我父に代り、以て教育の權を奪ふ。其の勢び卒に此に至る亦宜ならずや。彼の孔丘尼父は、隣家の父なり。一旦突然として我神州に入り、以て我神聖教育の權を横奪し、民の之を仰ぐこと日月の如く、之に親しむこと父母の如し。復た皇祖天神の大徳を念はざるに至る。是れ其の害、隣父來り人の子の耳を聒するものと、奚んぞ異ならんや。今世の西洋を學ぶもの曰く、拿破崙、曰く彼得。曰く歴山王。曰く耶蘇。曰く馬哈麥、猶ほこれ隣父なるのみ。其の艶稱欽慕するものも、曩時の儒流、堯舜禹湯文武周公孔子を仰ぐものと、勢を同じくす。而して其内に背き、外に向ふの意、符節を合すが如し。夫れ苟くも内に背き、外に向ふの弊

たるを知らば則道に志すもの亦以て戒しむる所を知る可きなり。何ぞ隣父の賢と否とを擇ぶの違あらんや。庾公之斯は、衛の射を善くせしものなり。其の戦に臨むや、矢を抽き輪を叩き、君に背き師に向へり。其言に曰く、我は夫子の道を以て、反つて夫子を害するに忍びずと。嗚呼今の洋學を爲すものは、盡く庾公之斯なり。曩時の漢學を爲すもの何ぞ獨り然らず。而して神州闔國の民、翕然として海外に向ひ以て庾公之斯たらしむるは、孔丘之が脩を爲すに非ずして誰ぞや。藥の奇功ある者、必らず奇害有り、智者を待たずして之を知るなり。故に曰く、理を見て勢を推し、勢を見て理を考ふれば、則ち神州の毒物は未だ論語より劇しきものあらざるなり。

讀論語中

客に重石丸を詰る者あり。曰く子孔丘を以て神州の鴉片と爲すは似たり。然るに先王既に取て之を用ゆ。則ち是れ先王を以て罪ありと爲すなり。子も亦罪ありと爲すなきか。重石丸曰く、然り。道は天地の道なり。天下は祖宗の天下なり。天地の道を奉じて、祖宗の天下を護るは臣子の道なり。今子孔丘を言ふを以て罪と爲す。是れ先王を引て以て孔丘を庇はんと欲する者なり。甚だしいかな。慣習の破り難きや。人隣父を認めて父と爲し、他日父を引き來り、實を告ぐるものあり。其の人信せず、怒て以て不孝と爲さば、誰か之を笑はざらんや。今臣子の

祖宗の典を講ずる者を疾む。豈父を引き來り實を告ぐる者を怨むに幾からずや。論語は隣父の教誨なり。抑も俚諺に云ふあり、孩兒の魂百歳猶ほ存ず。嗚呼漢籍の神州に入るや久し。其の人心を染むる一朝一夕の故に非ず。則ち隣父の教誨を認め以て家傳と爲すも亦宜し。然りと雖も家に成法有り世々之を傳ふ。隣父の言、或は往々家法と齟齬する者あれば、寧ろ隣父を捐て、家法に従ふの得計たるに如かんや。

夫れ我が帝系の天神に出づるは、則ち天人の合一するなり。固より唐虞三代の祖を天に配するものと同じからず。而して三器の尊は亦所謂九鼎なるものと日を同じうして語るべからざるなり。伊弉諾、伊弉册尊の萬物を生成し、大名持、少彥名命の

國土を経營し、天照大神の鴻基を立て、素盞鳴尊の航海を創め、神武の東伐、景行の西征、倭武の四裔を平らげ、神後の三韓を服して、盛徳大業民今に到るも其の賜を受く。

而して儒者徒らに禹稷の水土を治め、武王周公の蛇龍猛獸を驅る者を以て、功と爲す。豈家法を忘るゝの甚だしき者に非るか。且つ夫れ孔丘の博學智辯なる世未だ其の比を見ず。然れども之を神皇の範を後世に遺す者に比すれば、則ち所謂渺たる滄海の一粟のみ。是に由て之を言ふ。孔丘未だ郷人たるを免れざるに、神皇未だ嘗て聖人ならざるはなし。但し彼に名目ありて我に名稱無し。猶ほ孝弟忠信、智仁勇義の目、彼より來つて其の實は、我に有す。予嘗て論語を読み竊かに世人の聖人を過信

するを疑へり。夫れ宰予、言偃、仲由、冉求の徒とは所謂七十子の巨擘に非るか。其人の或は白晝寢に入り、中壽言ふべからざるの行ひを爲し、或は犬馬を以て親を遇し、以て不敬の責を取り、或は身を不孝の術輒に誤まり、以て其の難に死し、或は季氏に事へ以て、聚斂の臣と爲る。所謂孝弟忠信、智仁勇義は果して何くに在るや。喪有る者の側に於て食し、未だ嘗て飽かざるが如く、是我が神州にては郷黨の自ら好む者も、爲すを屑しとせざる所なり。聖人にして之を能くす、何ぞ以て贊稱するに足らん。意ふに支那の風俗貪鄙饕餮なり。蓋し七十子の徒と雖も、亦往々にしてこの弊を免れず。故に論語を記する者、傳へて之を珍とせしなり。少時好色の戒の如きは小人に在らずして、君子

三戒の一となる。則聖人も常人に異ならざる亦以て見る可し。世の心を聖人に酔はすもの、其意寧ろ神皇を議しまつるも聖人を議する勿れと曰ふが如し。予是を以て慣習の實に畏る可きを知るものなり。地藏木佛に翁婆拜を爲し、他日之を毀たば則ち誰か以て心に快と爲さん。神州の聖人に於ける嘗に地藏木佛なるのみならず、告ぐるに神皇の道を以てすと雖も、翻然彼を捨て此に従ふこと能はず。以爲へらく天の覆ふ所、地の載する所、日月照らす所、霜露墜つる所、復た聖人無しとおもへり。是れ其心既に君父に背き以て戈を倒にするなり。夫れ孔丘は未だ嘗て聖を以て自ら居らざるに、神州の人反て天上天下唯我獨尊の人を以て之を待たんと欲するは、乃ち支那の私言に惑ふことなか

らむや。予世の支那の私言に惑ふ者を憐れみ、之を議する所以なり。諸砮硃を玉と爲し以て之を銜ふに譬ふれば、賈人となりて瑕疵を斥けざるを得ず。然らずんば論語の諸篇佳言善行往々にして観る可き者あり。決して神皇の道全く此に反すと曰ふには非るなり。もし夫れ神皇の典、世に明らかとなれば、則ち所謂論語なる者あるを知り、或は取て之を読む。亦何ぞ不可ならん。吾れ固より夫の孔丘を疾まざるなり。

讀論語下

應神帝十六年に百濟より論語を買ぎ、帝苑道皇子をして王仁を師とせしむ。世に稱す。神州儒術の開けしは、應神帝信じて之を用

ゆるに由ると。予意ふに然らず。蓋し應神帝未だ必らずしも天下に
 弘むるの意あらず。特に菟道皇子をして之を試みしめたるのみ、
 何を以て之を謂ふか。夫れ異方の言、殊域の法一旦國に入るや、
 利害得失の如何を問はず、網羅して之を蒐取するは智者の爲さ
 る所なり。曾て帝の明にして之を爲すと謂ふか。且つ果して帝
 をして深く之を信せしめたらば、其の學を何爲れぞ菟道皇子に
 於て止めたるや、仁德帝儉素にして民を撫す。或は以て其の儒
 術に出づるものと爲す。是れ想像の説なるのみ。帝論語を讀む、
 史に明文無し。其の宮室を卑くするの事、偶論語と符する者、
 之を奇中と謂はざるを得ず。其の菟道皇子と兄弟相讓る者は、
 亦偶伯夷泰伯の事に類す。豈之を讀書の功と謂ふべきか。もし

其の相類する者を以て、論語に出づると爲さば則ち神武帝の皇
 天を禋祀し、成務帝の國を界し縣を分つが如し。是れ其の事何
 學に出づると爲すや。もし論語の來貢をして、神武、成務二帝
 の世に當らしめば、則ち之れ聖人を學ぶと謂ふか。何ぞ其の彼
 を信じ、己を疑ふの甚だしきや。且つ論語を讀む者をして、其
 の功の速やかなること、悉く仁德帝と菟道皇子の如しと謂はゞ、
 則ち信立の不孝豈猶り感化せざるの理有らんや。亦以て其の天
 資に出づるを證するに足る。予古語拾遺を觀るに、履仲帝の時三
 韓貢獻し、奕世絶ゆること無く、齋藏の傍更に内藏を建て官物
 を分收す。仍て阿智使主と百濟博士王仁とをして其出納を記せ
 しむ。夫れ王仁の來るは、應神帝の世に在り。蓋し此時齡既に

百數十年なり。果して應神帝論語を信ずること、世人の言ふ所の如くならしめば、則ち王仁の仁徳、履仲に於ては國家の元老帝者の師なり。今其の職とする所を觀るに、僅々賤有司のみ。亦以て朝廷王仁を遇するの輕重を見るに足らず。且つ帝をして儒術を喜ばしめば、何ぞ庠序學校を興し、以て天下を導かざるや。履仲帝の四年始めて國使を諸國に置き言事を記す。然れども其の王仁と阿智使主とをして官物の出納を記せしむるを觀れば、此時漢學未だ開けず、朝廷字を識るの人に乏しきを知る可し。蓋し應神帝後、朝廷の文物制度は未だ嘗て前朝に異ならざるに、論語の貢、適帝の時に當る。世これを以て遂に儒術を帝に歸せり。而して天智帝實に唐風模擬の祖たるを知らず。浮屠の入

るは、欽明帝の世に當り、而して帝之を水火に投ず。其の法の盛んなるは、聖武、孝謙の世に在り。近世洋學の來るは、孝明帝の世に在り、而して其の學の行はるゝは、明治の今日に在り。然らば則ち應神帝の漢學に於ける猶ほ欽明帝の浮屠に於ける如く、孝明帝の洋學に於けるが如し。其の之を納るゝを以て、之を篤學力行の君と謂ふ。亦誣ひざるか。
 長江大川、流沫千里、清濁の判淵源に出づ、是れ理の見易きものなり。朝廷武を尙び、儒を賤しむは古より然りと爲す。是を以て菅公諸家決して羽林の士に齡ひするを得ず、是れ其の法なり。安んぞ應神帝王仁を遇するの遺意に淵源せざるを知らんや。足利氏の末、儒皆剃髮す。徳川氏の制、林氏をして學柄を

執らしむ。然れども任ずるに國政を以てせず。諸藩の儒者を遇する亦概ね之を豎卜方伎の流に廁む。豈神州の大幸ならずや。然らずんば、林道春泰伯の後を以て、皇統を議し、伊藤維楨帝室を廢するを以て言と爲し、物茂卿日本夷人を以て自ら居る。其卓々たるものすら猶且つ是の如し。其他は又何ぞ説かん。萬一是の輩をして樞要の地に在らしめ、以て悉く詩書の言ふ所を行ふを得せしめば、則ち其の害底止する所、恐らくは今日の洋學の下に在らざるなり。高麗王の表を上つれる其の言に曰く、高麗王日本國に教ふと。蓋し此の時、彼亦既に論語を讀む。殆んど神州を夷視するの意あり。菟道皇子其の無禮を怒りて之を破るを觀る。則ち皇子の聰明頗る國體に達し、復た厩戸皇子の

内外を顛倒するの比に非ざるなり。則ち應神帝の論語を皇子に託する、人を得たりと謂ふ可し。嗚呼皇子をして學政を議せしむれば、則ち論語の如きは、其の用、其の舍未だ知るべからざるなり。抑も其の之を天下に布く、亦或は裁度損益する所ありて以て之を用ひんとするなり。必らずしも異域の成法を株守して以て害を後世に遺さず。不幸にして皇子蚤世し、應神帝の意をして天下に達するを得ず。惜しいかな。

原著者跋

豊太閤髯虜をして我文を用ひしめんと欲し、秦の呂政詩書を焼き儒者を坑にす。豈曠世の大快事ならずや。北條早雲英雄の心を攪るを以て韜略を悟り、晋の石勒無學の資を以て漢書を評

す。亦此れ眞に予の遊説を願ふ所なり。余平生狂を病み、狂すれば則ち咄々怪事語を爲す。然れども終に自らは以て狂と爲さざるなり。間時事に感ずるあり、試みに之を紙に書し、言論奇古にして殺氣風を生ず。意は武断に在り、文明世界に用ゆる所無し。

嗚呼太閤、呂政、早雲、石勒の輩再生するに非ざるよりは、誰か狂と不狂とを判せんや。然りと雖も天未だ神州を棄てざれば、則ち未だ屠狗、監門、鍛工、藥商、豪俠、大盜に其の人無しと謂ふべからず。一念此に到れば則ち人をして復た自愛の心を生せしめ、踏海の歎未だ發す可らざるのみ。

明治二十年丁亥十二月二十三日の夜寒甚だし。適一男子を夢

む。自ら王景略と稱す。曰く寒士國を憂ふること此の如し。何を肉食の無狀なるやと。覺後衾稠鐵の如し。筆を呵して書す。捫虱の手、血痕猶ほ腥ぐさし。

豊城居士渡邊重石丸、

固本策正解(終)

原著者小傳

豐前中津の人家世々吹出濱古表神社の大宮司たり。有名なる國學者渡邊重名の孫なり。父重蔭、兄重春共に家學を奉じ、命名天下に高し。殊に祖父重名は本居宣長の高弟にして、青柳種信、長瀬眞幸と共に、九州の三大家と稱せらる。本居宣長嘗て歌を寄せて曰く、

都人まだ踏みなれぬ足引の

やまとの道は君しるべせよ

都人あらぬかたにぞ迷ふめる

和歌の浦路も君しるべせよ

と、其の師に信せられしこと此の如し。故に兩豊人士をして皇

國學に従事せしめ、子孫亦國典に通じ、皇學に精しき人を出す、蓋し偶然ならず。中山愛親、日野資枝、芝山持豊、外山光實、松平定信等の愛顧を蒙ること最も厚かりき。父重蔭亦和歌に長じ善詠を以て名あり。兄重春よく父祖の家學を興し、謹直徳望世に高く、最も國學に遠く兼ねて漢學に達し、詩歌を能くし其の長篇の咏歌の如きは、人の稱嘆する處なりき。斯の如き家庭に生れ、矢野玄道を師とす。矢野玄道通稱を茂太郎といひ、愛媛縣の人なり。平田篤胤の門に入り國學を修む、明治維新前、玉松操、樹下茂國等と國事に奔走し、後ち神祇官となる。性質蒲柳にして酒を嗜むも、儼として威容あり。終身妻を娶らず、斷然女色を近けざりき。常に水晶玉を手にし、歿

後我靈魂をこれに移すと言ひ、果して上天の日、この水晶玉に

移靈すると共に絶命せり。

重石丸斯る國士に師事す。その時勢に容れられず、轉軻不遇

の間に世を終る亦疑ふの餘地無きなり。自ら狂と爲さるるも、

世人狂と爲す。豈現代に於ける皇道大本の人々と何ど異ならん。

記して茲に至る。感慨無量のものあり。本書神務の餘暇倉卒の

間に成る。正解は單に紹介に過ぎざるのみ。(終)

大正十年五月三日印刷

大正十年五月廿八日發行

(固本策正解奥附)

定價金八拾錢

著作者 外山豊二

東京市日本橋區大傳馬鹽町十八番地

發行者 松崎善太郎

東京市小石川區雜司谷町五十六番地

印刷者 高嶺繁太郎



東京市日本橋區大傳馬鹽町十八番地

發行所

電話 神田一四〇六番

明誠館

【堂嶺高所刷印】

服部 靜夫 著

最新刊

大本 教祖 出口直子傳

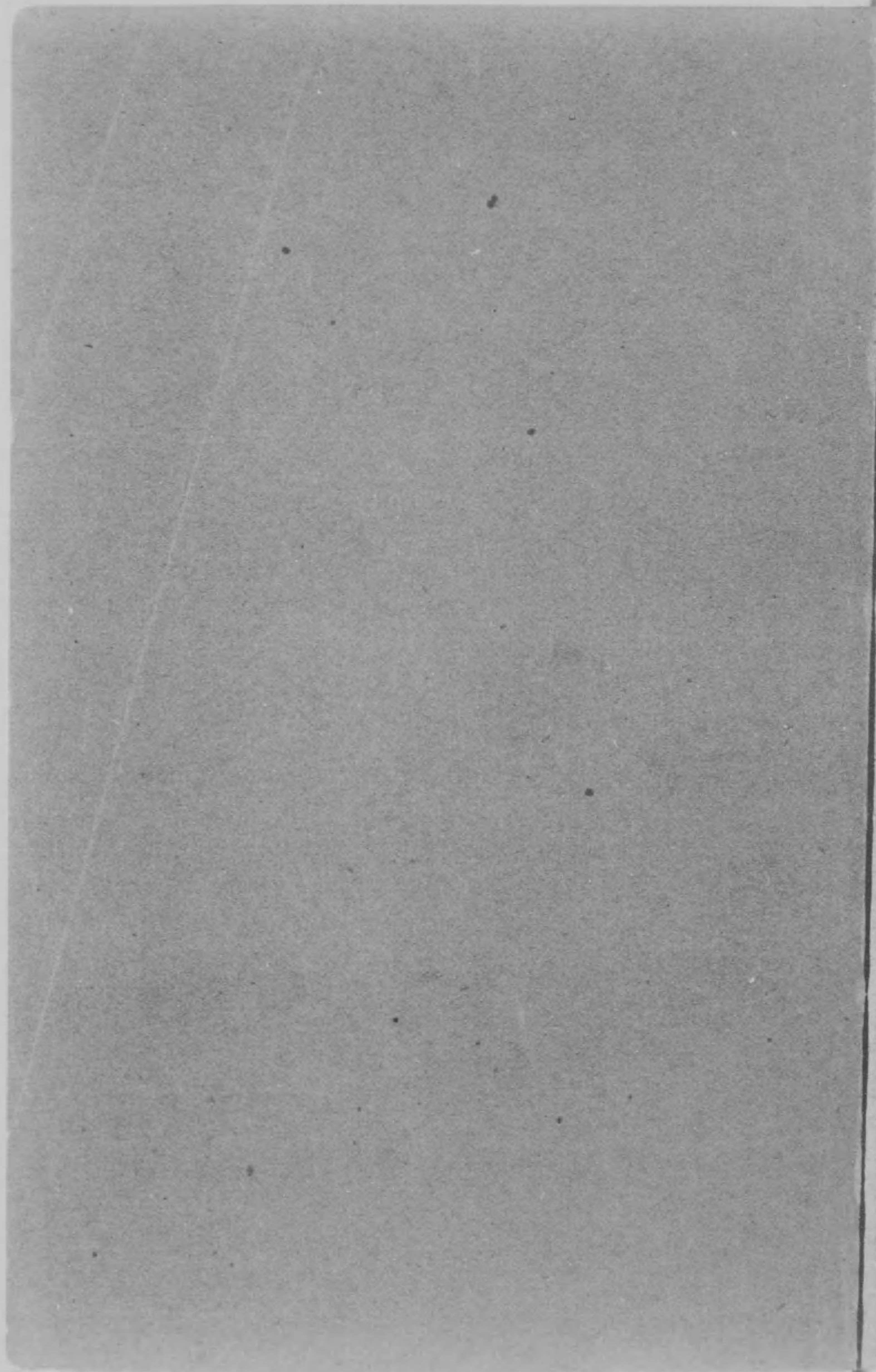
四六判 上製美本
全 壹 冊
定價 金 貳 圓
送料 金 八 錢

謎の綾部に生れた出口直子は、紙屑買の狂氣婆であつたと云ふ。夫れが、今では數十萬の信者を擁する一大教團の教祖として祭り上げられ、近世稀に見る奇蹟の一つを示した。大化物がそれとも良の金神が懸つたのか、兎に角こんな間違ひ切つた世の中を、立替へ立直さうと叫ぶ位だから、何處か異つた所があるかも知れない、先づ其の眞生涯に打つかつて、見なくて、何うして確な判断が下せよう、假令幾分でも正しく生きやうと思ふ人であるなしに拘はす、まあ虚心坦懐に、問題の大本教祖の生涯を調べて見るも、一興であらう左うすると、屹と最初は噴き出すに違ひない、仕舞には泣くに違ひない、或は底の知れない大きな力を與へられるかも知れない、随分皇道を論じ大本を議した刊行物もあるが、未だ其の一代を通じて語り盡したものは無い、本書はさまざまの意味に於て、最も公平に精細に、赤標々に其の行蹟を述べた記録である、強て一讀を奨む。

發行所

東京市日本橋區大傳馬鹽町十八番地
振替口座東京一〇七〇八番

明誠館書店



393
12

10.10.18

終

